
悪魔 - デモンズ -

SIG5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔 - デモンズ -

【Nコード】

N1244W

【作者名】

SIG5

【あらすじ】

人間と魔族が争いを続ける世界を生きる青年の物語。

2つの種族が共存共栄することはできないのか？

そして、真の悪魔とは……？

「差別」を1つのテーマにした小説です。

登場人物

第1章

【北原信治】 きたはらしんじ

> i 3 4 9 7 1 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍第0309小隊所属。23歳。基本的には真面目で素直な性格だが、納得のいかないことは絶対に認めない、頑固な一面も。

【栗林奏】 くりばやしかなで

> i 3 4 9 7 3 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍第0309小隊の小隊長。22歳。刀を使う。女性軍人としてはトップクラスの実力を持っている。公私混同しないタイプ。

【矢野将太】 やのしょうた

> i 3 4 9 7 4 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍第0309小隊所属。22歳。自分の欲望には忠実なタイプ。信治、奏とは幼なじみ。

【伊藤祐介】 いとうゆうすけ

> i 3 4 9 7 5 — 4 2 1 2 <

第5魔族収容所看守。26歳。他の軍人以上に魔族に対して壁を作っている。

【鈴木雅也^{すずきまさや}】

> i 3 4 9 7 6 — 4 2 1 2 <

第5魔族収容所看守。25歳。響とつるんで看守としての生活を「楽しんで」いる。身長が低いことを気にしている。

【富田響^{とみたきょう}】

> i 3 4 9 7 7 — 4 2 1 2 <

第5魔族収容所看守。25歳。喧嘩好きの不良。魔族に対して何の感情も持っていない。

【千住院由実香^{せんじゅういんゆみか}】

> i 3 4 9 7 8 — 4 2 1 2 <

魔族。20歳。氷の魔法を使う。冷静で誠実な性格。

第2章

【丹波美奈^{たんばみな}】

> i 3 4 9 8 0 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍第0309小隊所属。19歳。若くして小隊の中でも厚い信頼を寄せられている少女。

【上田瑞紀^{うえだみずき}】

> i 3 4 9 8 1 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍第1008小隊所属。23歳。実直な性格。2本の短剣を使った素速い攻めが得意。

【若松啓太】
わかまつけいた

> i 3 4 9 8 3 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍第1008小隊所属。23歳。少し頑固なところはあるが、仲間思いの男。

【六神殿梓】
むしんでんあずさ

> i 3 4 9 8 4 — 4 2 1 2 <

魔族。炎の魔法を使う。23歳。快活な性格だが、実はけっこうデリケート。

第3章

【鎬之宮修】
かぶらのみやおさむ

> i 3 4 9 8 5 — 4 2 1 2 <

上級魔族。21歳。炎の魔法を使う。上級魔族に選ばれたこともあつてか、少々自己中心的な性格。

【杉田総一郎】
すぎたそういちろう

> i 3 4 9 8 7 — 4 2 1 2 <

剣士。23歳。軍には所属しておらず、気の向くままに各地を旅している。

【啍民城渚】
わたみしろなぎさ

> i 3 4 9 8 8 — 4 2 1 2 <

魔族。18歳。鋼の魔法を使う。我が儘な美少女。

第4章

【加藤正史】
かとうまさふみ

> i 3 4 9 8 9 — 4 2 1 2 <

魔族掃討軍の元訓練員。58歳。不愛想だが、教え方は一流。

第5章

【飯田誠】
いいたまごころ

> i 3 4 9 9 0 — 4 2 1 2 <

エトニアにある診療所の医師。30歳。元不良疑惑あり。

【啍民城明憲】
わたみしろあきのり

> i 3 4 9 9 3 — 4 2 1 2 <

上級魔族の1人。鉄の魔法を使う。渚の父親。

舞台

【アクネ】

首都。街の中心部には掃討軍の総本部や、人工魔法に関する研究施設などがある。掃討軍第0309小隊もこの都市の東部に拠点を置く。

【イオリア】

アクネの東にある街。アクネに次いで発展している都市。西部には第5魔族収容所がある。

【ウエルド】

アクネの西にある町。山が多く、町の周辺には自然が溢れている。東部には掃討軍第1008小隊の拠点や第8魔族収容所がある。

【オルガ】

ウエルドの西にある町。大きな建物はあまりなく、住宅街が広範囲に広がっている。

【エトニア】

アクネの北西に位置する町。北部には山が連なり、建物も少ない田舎町。

用語

【魔族】

魔法を使うことができる特殊な人種。瞳に映る^{かき}」を組んだような模様が特徴。

【魔法】

魔族だけが使うことができる特殊な力。魔族によってその種類は違う。

【魔法物質】

魔族が生まれながらに持っている物質。魔族の力によって様々な物質に変化する。

【魔力】

ある1人の魔族が持っている魔法物質の量。魔力が高いということとは、魔法物質をたくさん持っているということになる。

【魔法支配能力】

魔族が生まれながらに持っている、魔法物質を操り、様々な物質に変化させる力。

【人工魔法物質】

魔族によって他の物質に変化した魔法物質を無効化する物質。

【魔族掃討軍】

魔族を殲滅するために組織された軍。

0 始まりの演説

大きな西洋風の建物。その建物の周りに非常に多くの人々が集まっていた。人々は「その時」が来るのを今か今かと待ち続けた。

ざわめきが大きくなる。1人の男が、建物のバルコニーに姿を現したためだ。

男は軽く右手を挙げてそのざわめきを静めると、口を開いた。

「我々人間はこれまで、魔族によって支配されてきた。奴らの持つ魔法に対抗する力を持たなかったためだ」

男は決して怒鳴っているわけではなかったが、その声には力強さがあった。

「我々は、奴らの言いなりになるしかなかったのだ」

男は、ここで少し間を空けた。人々が再びざわめく。先ほどのものとは少し違う、怒りを含んだざわめきだ。男は密かに笑う。だがすぐにそれを消し、また右手を挙げて話した。合図をする。

「……だが、我々は魔法に対抗する力を手に入れた。もう奴らの思い通りにはさせない。魔族に我々の力を思い知らせてやるのだ」人々の間から歓声があがった。

「魔族は罰を受けるべきだ。我々を苦しめてきた、その罰を……！」男は徐々に語勢を強めていく。それに伴って歓声も大きくなる。

最後に男は、こう叫んだ。

「私はここに、魔族の支配からの脱却を宣言するッ！」
歓声は最高潮に達した。

1 / 異動

魔族掃討軍第0309小隊は、首都アクネの東部を拠点に活動している。「活動している」と言っても、北原信治きたはらしんじがこの小隊に入ってから数年間、戦闘はほとんどなく、事務的な仕事がほとんどだった。現在も掃討作戦を頻繁に実施しているのは地方の小隊ぐらいだろう。

「魔族、大分減ったよなあ……」

信治が今見ているのは、掃討作戦が始まってからの魔族の数の推移だ。

「これまでの掃討作戦で3分の1くらいになってるもんね」

信治の独り言に反応したのは、小隊長の栗林奏くりばやしかなでだ。

「まだ3分の1いるとも言えるけど」

奏の言葉に、副隊長の矢野将太やのしょうたはだるそうにそう言った。

信治、奏、将太の3人は幼なじみであり、軍の訓練生活も共にしてきた。そのため、小隊に入ってから自然と集まって話をすることがよくあった。

「時間の問題だよ」

信治は将太に言う。

そう。いずれ悪魔たちはすべて葬られ、この国は平和になる。この時信治はそう信じていた。この時まででは。

翌日、0309小隊のところへ、1人の軍人がやってきた。

「どのようなご用件でしょうか……？」

奏が少し緊張した面持ちで、しかし落ち着いた声音で尋ねた。

「人事異動を言い渡しに来た」

男は事務的に告げる。

「人事……異動」

奏はそのままを口の中で繰り返した。

「北原信治はいるな？」

「あつ、はいっ！」

自分の名が呼ばれ、少々どぎまぎした様子で信治は返事した。

「お前にはイオリアの魔族収容所へ行ってもらっ」

「しゅ、収容所？」

「詳細はここに記してある」

信治の反応を気にも止めず、男は書類を奏に渡す。

「以上だ」

それだけ言うと、男はすぐに出ていった。

「なんか感じ悪いなあ……」

男が出ていった扉に向かって言う奏に将太が

「それよりその書類」

と促す。

「あ、うん。……ええと、」

奏はそれに目を通す。

「……えっと、要は、信治の働きが良かったから、イオリア……ア
クネよりもっと東だね……にある第5収容所で看守として働いてく
れってことみたい」

「とりあえず悪報ではないわけか。よかったあ……」

信治がほっと息をつく。

「当たり前じゃん。看守だよ？魔族収容所の看守は、上の人たちに
認められなきゃなれないんだから！」

奏は半分呆れた様子で言う。もう半分は仲間が認められたことに對する喜びだ。

「じゃあ、今夜はプチ送別会でもしようか」
奏は笑顔でそう宣言した。

プチ送別会でしめやかに語り合った、その翌日の昼過ぎ、信治は仕事場にある私物を車に積み込んでいた。家の荷物は既に積んである。実家が仕事場の近所にあつた信治にとって今回の異動は、一人暮らしの始まりをも意味する。人生の大きなターニングポイントであつた。

「これでよし……と」

「いよいよ出発、だね」

奏が見送りに出てきた。小隊のメンバーも、それに続く。

「頑張れよ」

将太は、それだけだった。らしいと言えはらしいが。

「うん、ありがとう」

信治も、それだけ返した。そして車に乗り込む。

「……たまには、戻ってきてもいいんだからね……？」

最後に奏は、彼女にできる精一杯の正直な言葉を口にした。

「うん。……それじゃあ、お世話になりました！」

信治は頭を下げてから、アクセルを踏み込んだ。

2 少女の記憶

人間たちが追ってくる。少女はひたすら逃げる。近くに住む人たちと共に。

「大丈夫っ、大丈夫っ」

誰かが、言った。自分に言い聞かせているのか、他の誰かを安心させるために言っているのか。

「……ああっ！」

先頭を走っていた男が、急に立ち止まった。あまりにも急だったので、少女は前の人にぶつかってしまった。

「どうしたんだよっ!？」

集団の後ろの方から、怒鳴り声が上がった。後方には、人間たちが迫っている。

「だ、めだ……」

その問いには答えず、先頭の男は言った。前方にも、人間たちが立ちふさがっているのである。

男の絶望感は、すぐに集団全体に伝染した。

「どけえエエッ！」

1人がパニックを起こして人間たちに向かって突っ込んでいく。その男は水の魔法を使い、人間たちを押し流そうとする。

人間たちは、その水流に多少押されたものの、ほとんど動じなかった。彼らが剣を振るうと、その大量の水は弾けるようにして消えたからだ。

「あ……!？」

「無駄な抵抗はよせ」

人間の1人が言った。そして男に斬りかかった。

「うわあああつ！」

男は自分の周りに水流を起こし、身を守ろうとした。が、その人間の剣は、それを一撃で消し飛ばすと、次の一撃で男の左肩に食い込んだ。

「ああアツ……！」

男の呻きと血飛沫が同時に上がり、直後、男は倒れた。

少女の周りからは、悲鳴すら起こらない。皆、恐怖の表情のまま、ただ、倒れた男を見つめている。

人間たちが一步、また一步と近づいてくる。少女の周りの人々は、相変わらず凍り付いたままだ。しかし、少女は違った。彼女の思考は止まっていなかった。止まってくれなかった。

（私も、あの男のように斬られて死ぬんだ……！）

そして、そのイメージがリアルに浮かび上がってくる。

「あ……、あ……！」

パニックに陥る寸前であった。しかし、その時。

彼女の手を、誰かが握った。温かいその手で握ってくれたのは、彼女の母親だった。そしてもう1人……彼女の父親は娘の頭をそっとなでると、言った。

「落ち着きなさい。大丈夫だから」

それで少女は、一旦冷静さを取り戻した。しかし。

2人の手が離れる。両親が人間に連れていかれる。

「あつ！待っ……」

後ろから別の人間に腕を掴まれる。

「離してっ」

「止めなさいっ！」

振りほどこうと動いた瞬間、怒鳴られた。

彼女の父親であつた。少女は驚いた表情のまま、彼を見つめる。

「大丈夫。いつか必ず、お前を助けてくれる人が来る」

少女は黙つて聞いている。しかし、流れだした涙は止まらない。

「……だから、お前はお前を見失つてはいけない。分かるな？」

少女は小さく頷いてみせた。

「そのくらいにしていただけませんか？」

1人の人間がイライラした様子で言う。

父親ははい、と答えて、その人間に従つた。少女は、もう暴れたりしなかった。……ただ、涙を流しながら、自分を冷酷な目で見下している人間に従つて歩いた。

少女は目を覚ました。……いつの間にか眠っていたようだ。

（5年は経つたと思うけど……それでも鮮明に思い出せるもんだなあ……）

そんなふうに思えるくらいに、彼女は冷静になっていた。

（お昼は食べたけど、夕飯はまだ出てないから……夕方くらいかな……？）

窓のない牢獄の中で、少女はそう推測する。

（もう5年……。まだ、私を助けてくれる人は来ないよ、お父さん）

3 第5魔族収容所

信治は第5魔族収容所にやってきた。

「やっぱ……緊張するな……」

そつと、建物の中に入っていく。……と、

「よおっ！」

「!？」

不意に、1人の男が声をかけてきた。

「お前が新入りか？」

「え……あ、はいっ」

信治が答えると、男は奥の方に向かって

「おーいっ！新入りが来たぞ！」

と叫んだ。

「おつ、来たか」

現れたのは2人の男。

「君が……えーと、」

「あ、北原信治です。よろしくお願いします」

「おう、よろしく。俺は伊藤祐介だ」

1番体の大きな男が言った。

「そんでもって、こいつが鈴木雅也」

「よろしくな」

平均的な身長 of 信治よりも、ずいぶん背の低い男だ。155くらいかな、と信治は推測する。

「あとこいつは富田響」

「ヨロシク！」

最初に声をかけてきた男だ。どうもヤクザっぽい臭いがする。

「仕事は2人1組ですることになってる。お前は俺と組むことにな

るから」

「はい。お願いします」

よかった、と密かに信治は思う。現時点では、祐介の印象が一番良かった。

「この間1人辞めちまってからは3人でやってたんだけど、これで元の体制に戻ったな」

「はあ」

「……さて、今日はもういいぞ」

しばらく話した後、祐介は言った。

「え？」

「仕事は明日から。その内容も明日説明するよ」

「分かりました」

収容所から徒歩10分ほどのところに、軍の寮はあった。当然のことだが、雅也と響の部屋もあり、信治は少々不安な気持ちになる（どうも、あの2人は苦手だなあ……）

などと思いつつ、信治は荷物の整理をした。

やがてそれが一段落し、時間を持て余していた信治は、1冊の冊子を取り出した。訓練中に使っていたもので、「人工魔法」について書かれている。

（良い機会だし、新しい仕事始める前に復習しとこうかな……）

信治は冊子を開いた。

【1、魔法】

人工魔法を学ぶためには、まず「魔法」を学ぶ必要がある。魔法とは、魔族だけが使うことができる特別な力のことである。

魔法を成立させているものは2つ。「魔法物質」と「魔法支配能力」である。魔法物質は、魔族の1人1人の周囲に常に存在する特殊な物質で、どんな物質にも変化するという。そして魔法支配能力とは、魔族の持つ、魔法物質を操る力のことである。

つまり魔法とは、魔法支配能力によって魔法物質を別の物質に変化させることを言うのである。

【2、人工魔法】

我々人間はこの魔法に対抗すべく、「反魔法物質」を完成させた。この物質は、魔法によって変化した魔法物質を、元の形に戻す作用を持っている。炎であろうと水であろうと、それが魔法によって作り出されたものであるならば、反魔法物質の力によって無力化できるということである。そしてこれを、我々は「人工魔法」と呼ぶのである。

反魔法物質は現在、武器の中に入れて持ち歩き戦闘の際に放出する、という形で用いられている。

我々は人工魔法を手に入れたことで、魔族の魔法に対抗することができるようになったのである。

「ふう……」

一通りの復習が済んだ頃には、外は薄暗くなっていた。

「さて、これで明日の準備は完璧だな」

4 出会い

翌日の朝。祐介は信治に仕事の説明を始めた。

「俺らがする仕事は主に2つ。囚人たちに食事を持っていくことと、彼らを監視することだ」

「はい」

「時間は0時から8時、8時から16時、16時から24時の3つのパターンがある。毎日時間変わるから気をつけろよ」

「はあ……8時間、ですか」

少し不安げな表情を見せた信治に、祐介は笑って

「大丈夫だって。ぶっちゃけ、食事持つてく以外はモニタールームに座ってるだけだから楽だぜ？」

と言う。

「はあ」

「まあ、すぐに慣れるさ。それじゃあ、今日からよろしくな」

「はい」

信治は早速、モニターに顔を向けた。

「おいおい、そんなにずっと見てると疲れんぞ」

祐介がイスに深く腰掛けて言った。

「え、あ、はあ」

「要領よく手を抜くことも大事なことだ。覚えとけ」

「分かりました」

一応、返事はしたもの、信治には何もしていない方がかえって疲れるように思われた。

（明日は本でも持ってこようかなあ……）

やがて時計の針が12時を指し、昼食を済ませた2人はモニター

ルームを出た。

「ここにはだいたい50人くらいの囚人がいるからな。そいつら全員に食事を持つてくのは、多少手間がかかるけど、置いてくだけだし、慣れれば短時間でできるようになる」

「はい」

「今日は初めてだからな。2人で一緒にいくけど、明日からは分かれて配るぞ。そうすりゃあ、すぐ終わる」

「分かりました」

祐介は、自分たちの昼食と共に届けられた、囚人たちの食事の乗った配膳車を動かし、テキパキと仕事をこなしていく。

「ほら、北原もやってみろよ」

「あ、はい」

信治も祐介と同じように置いていくが、魔族たちの様子が気になつてしまい、彼ほどのペースでは仕事をこなせない。魔族の存在が、とにかく恐ろしかった。

そんな信治の様子を見て祐介は

「大丈夫。この建物の中には、反魔法物質がばらまかれてる。魔法はほとんど使えないさ」

「はい……」

信治も、頭では理解している。しかし信治の恐怖心は、すぐには収まらなかった。

ビクビクしながら信治は、それでもなんとか仕事をこなしていった。……と。

信治は足を止めた。1人の魔族の様子が気になったからだ。

その魔族の少女は、こちらをじっと見ていた。しかしその表情から憎悪は感じられなかった。「見ている」というよりかはむしろ、「観察している」と言った方が正しいかもしれない。

信治と目が合うと、少女はわずかに目を見開いて、驚いたような様子を見せた……が、すぐに落ち着きを取り戻して……笑った。とても寂しそうに、笑った。

(……！)

その瞬間、信治はとても苦しくなった。まるで、悪戯をしているところを大人に見つけられてしまった子供のような気持ちに陥ったのだ。

気がつくと、少女はもう、元の静かな表情に戻って、配給された食事に口をつけていた。

「おい北原、どうした？」

祐介が怪訝な顔をして声をかけてきた。

「えっ、あ、いや……なんでもありません」

「そうか？ならいいんだけど」

祐介はそれ以上詮索することはせず、仕事に戻った。信治も彼に倣った。

不思議とその後は、仕事がスムーズに進んだ。

5 人間と魔族

次の日から、信治と祐介は分かれて食事の配給を行った。しかし、信治の中にあつたはずの強い恐怖心は、もう消えていた。悪魔のように見えていた魔族たちが、今はむしろとても弱い存在に見えるのである。そしてそのように見えるようになった原因は、どう考えてみても「彼女」だった。

その日も彼女は信治を「観察」していた。しかしあの寂しい笑みを見せることはなく、無表情であつた。信治は声をかけてみようかと思つたが、結局そのまま仕事を続けた。

その次の日は、休日だった。信治は何をするでもなく、自分の部屋にいた。

（あの子も、魔族なんだよな……）
いつの間にか、あの少女のことを考えていた。

今まで魔族を見たことがなかったわけではない。信治だって、戦闘に参加したことはある。だが、街に現れる魔族たちはもっと、憎悪に満ちた表情でこちらを睨んでいた。その様子は、まさに悪魔であつた。

しかし、彼女は違った。信治には、彼女が悪魔であるようには見えなかった。

「でも、魔族は罰を受けるべきなんだ……よな……？」
なんだか、分からなくなつてしまった。

翌日。少女はやはり、信治を観察していた。信治は少女に話しかけてみることにした。

「どうして俺を見てるの？」

少女は少し驚いた様子を見せた。その状態のまま、しばらく信治の顔をまじまじと見ていたが、やがて

「違う気がする……」

と言った。

「違う？何が？」

しかし少女は、それ以上は何も語らなかった。信治は諦めて仕事に戻ったが、彼女の口にした言葉が気になった。

（「違う」って、どういうことだ……？）

モニタールームに戻ってきた信治を見て、祐介が声をかけてきた。

「何かあったのか？」

「え？」

「なんか、悩んでるっぽかったから」

「ああ、いや、悩んでたっていうか……」

「？」

信治はイスに腰掛けると、読みかけの本を開いた。が、すぐに閉じて、言った。

「……人間と魔族は、何で戦うんでしょうね？」

「はっ？」

祐介が呆れた様子で信治の方を見る。

「何言ってるの、お前？」

「や、7年前まで、人間が魔族に支配されてたっていうのは知ってますけど……6年前に掃討軍の活動が始まって、その1年間で魔族の支配体制はもう崩壊してましたよ。もちろん、魔族は罰せられなければならぬっていう、あの演説が間違ってるとは思いませんし、

だから俺は3年前に軍に入隊したんですけど……なんかちょっとやりすぎかな……なんて」

「余計なことは考えんな」

祐介は、先ほどとは打って変わって、いつになく真剣な様子でぴしやりと言った。

「でも」

「無意味だ。んなこと考えても」

祐介はそれ以上聞きたくない、というように、信治から目を背けた。しかしその目には、なぜか苦痛の色が見て取れた。

次の日から、少女は信治を観察することを止めた。逆に、目を合わせないように下を向いていた。しかしだからと言って、信治の中に生まれた疑問が消えるということとはなかった。信治は食事を持っていく度に、少女に声をかけた。が、彼女は聞こえていないかのようについているだけだった。

6 心

少女の言葉の意味を知ることができないまま、2週間ほどの時が経った。そんなある日。信治はその日も、少女に話しかけた。

「頼むよ。俺ホントに、あの言葉の意味が知りたいんだ」

しかし、少女は何も答えない。信治は少し腹が立った。

「まだ支配者気取りかよ……」

口をついて出た棘のある言葉は、少女の癪に障ったらしい。彼女が顔をあげて、信治を睨んだ。

「何勝手なこと言ってるの！？私たちのこと、何も知らないくせにっ」

だが信治は引き下がらなかった。

「俺らを支配してたのは事実だろ！？」

「それは偏った歴史です！人間から見た、人間にとって都合の良い歴史」

信治は一瞬、返す言葉を失った。それは認めざるを得ないように思われた。でも、と信治は思う。

「でも、だったら教えてくれよ！教えてくれなきゃ分からない！俺は知りたいんだ！」

今度は少女が言葉を失った。少し間があいてから、

「……あなたは、」

彼女は言葉を選びながら言った。

「わたしたち魔族のことを、知りたいんですか？私の話、聞いてくれるんですか？」

彼は少し返事に窮した。なんと答えても、後戻りはきかないような気がしたからだ。

「……うん。俺は、魔族のこと全然知らなくて、ただ、魔族は人間を支配している悪魔だって、それだけ幼い頃から教えられて……何も知らないまま戦ってきた。でも、人間の中にいい人と悪い人がいるように、魔族だって、悪いやつばかりじゃないんじゃないかって、俺は君に会って思うようになった」

少女は大きく目を見開いた。

（お父さん、やっと、来たよ……！）

「君たちのこと、教えて。人間と魔族の誤解を解くために」

少女は大きく頷き、微笑んだ。その笑顔からは、以前に笑った時のような寂しさは感じられなかった。

「この前言ったこと、あれ、悪い意味じゃないですよ」
「え？」

信治が首を傾げると、少女は笑って言った。

「あなたが聞きたがってたじゃないですか」

「え？あ、そうだ」

信治は恥ずかしくなって頭を掻いた。

「『違う』って言ったのは、あなたの雰囲気。他の看守とは違う感じが、あなたからしたんです」

「そうだったのか……」

彼女の心を開けた気がして、それが嬉しくて、信治にとってそれはもう、どうでもよくなっていた。

「私の感覚、間違ってますでした！」

少女は嬉しそうに笑い、信治もそれにつられて笑った。

「おい、騙されんな」

突然、少女の向かいの牢にいる男が言った。

「えっ？」

信治と少女は驚いてそちらを向いた。

「その男は魔族の重要拠点なんかの情報が欲しいだけだ」

「なっ！？違います！」

信治が否定する。

「そう考える方が辻褄が合う。有益な情報は、お前の地位を上げるのに役立つ」

「違う！俺はっ……」

「そうじゃないっていう保証がどこにある？」

「それは……」

信治は、答えられなかった。

「どこにもないだろう？」

「……」

男は信治を睨み付けた。

「とつとと失せろ！」

その男の声に続いて、周りの魔族たちからも声が上がる。

「そうだ！消えろ！」

「人間なんかと馴れ合う気はねえ！」

ざわめく牢獄で、信治は黙って拳を握りしめているしかなかった。

「黙れエツ！」

突然の怒鳴り声に、ざわめきはひとまず収束する。声の主は、祐介だった。

「北原、まだ配り終わってねえのか」

「……すいません」

「まあいい。早く配っちまうぞ」

「はい……」

そうだ、早く行けと先ほどの男が言い、それにつられて周りも再び騒ぎだした。……と、祐介が剣を抜き、牢に叩き付けた。金属と金属がぶつかり合う大きな音が、牢獄に響き渡った。牢の通路側に近づいていた男は、目の前でその刃を煌めかせている剣に驚き、奥へと後ずさる。

「黙れつつつたのが聞こえなかったのか？」

祐介は冷酷な声の調子で言う。

「魔法が使えない魔族を斬るのは、簡単だ。今すぐ死にてえってんなら、騒げよ」

牢獄は、静まり返った。

「……さつさと済ませるぞ」

祐介は信治にそれだけ言っつて、いつも通りの手際によさで食事を置いていく。信治は少女を見たが、彼女がこちらを向くことはなかった。

「何やってたんだ？」

モニタールームに戻つてきてから、祐介は信治に訊いた。

「……魔族のことを知ろうと思つたんです」

「やめろ」

しかし信治は、納得がいかなかった。

「でも、やっぱり変ですよ、今の状態。魔族の支配体制は、とつくに崩壊しました。もういいんじゃないですか！？」

「魔族は人間を苦しめてきた罰を……」

「俺も、それを当たり前のこととして受け入れていました。でも、ここに来て、それは違ふんじゃないかって思ふようになりました」

「……」

「俺はこの国の歴史を、人間目線でしか知りません。その歴史に登場する魔族は悪魔ですよ、確かに。でも、魔族から見た今の人間も、同じように見えてるんじゃないですか！？」

祐介は苛立たしげにイスに座り、頬杖をついた。そして、信治には顔を向けずに、口を開いた。

「……それで、お前はどうするんだ？」

「魔族のことをもつと知って……」

「それで？」

「……」

「何も、で क्या あしねえんだ」

祐介の怒りは、信治に向けられたものではないようだ。た。

「お前みたいに考えてるやつは、他にもいる。だけど、何もできない。今や、国全体が魔族の掃討を支持してるんだ。お前がちょっと騒いだぐらいじゃ、何も変わらねえよ。お前が潰されて、それで終わりだ」

「……」

信治は反論できなかった。そんな信治の様子を横目で見つ、祐介は大きく息を吐き出した。

「無駄に騒いで殺されるくらいなら、何も考えずに働いてた方がマシなんだよ」

7 中央魔族収容所

祐介に諭されてから、信治は少女に話しかけなくなった。少女の方も、彼と目を合わせるのを避けていた。しかし、信治は諦めたわけではなかった。この国を変える、とまではいかないが、少女だけでも、助けることはできないだろうかと考えていたのだ。

そんなある日のこと、出勤してきた祐介と信治を、前の時間勤務していた響と雅也が迎えた。

「よう祐介。今日、来るみたいだぜ？」
響が言った。

「来るって……中央収容所のやつらか？」
祐介が嫌そうな顔をして問い返す。

「ああ。お前たちの勤務中に来ると思うから、ヨロシク」
逆に響は、愉快そうに答え、雅也と共に部屋を出ていった。

「くそ……よりもよってこのタイミングかよ……」
「そんなに嫌なんですか？」

信治が問うと、祐介は不機嫌そうな顔で信治を見た。

「……お前にとってな」

「え？それってどういう……」

「来たら分かる」

祐介は強引に話を切ると、新聞を開いた。普段は読まないが、これ以上話す気はない、という意志表示には役立った。

囚人たちの昼食の回収が済んだ昼過ぎごろ、1台のトラックが収

容所に来た。祐介の様子を見る限り、この車に中央収容所の看守が乗っているようである。

トラックから降りてきた男が言った。

「今日は4人動かす」

「分かりました」

祐介が答え、牢へ向かう。

「あの、動かすって……？」

信治が訊くと、祐介は渋々答えた。

「ここからアクネの中央魔族収容所に囚人を連れていくんだ」

中央へ移ることになった魔族は牢獄の奥、すなわち、この収容所に長く居る順に4人。少女の前の男までだった。

「嫌だ……俺は行かねえ……！」

少女の前にいた男は、牢の奥で拒んだ。他の3人はすぐに諦めて祐介たちに従ったが、彼の拒み方は異常だった。

「いいから出てこい」

祐介がイライラした様子で言う。

「嫌だ！」

男は子供のように牢の奥から叫び、魔法を使おうとした。が、物質は形成される前に砕け散って消えた。

「どうしてそんなに嫌なんです？」

信治が問う。

「しらばっくれるな！」

男は叫んだ。

「中央に連れていかれたやつは死ぬまで働かされるか、実験材料として使われるんだろオ！」

「え……！？」

信治は絶句した。

「誰に聞いた？」

祐介が冷静に問う。

「お前の仲間が言ってたんだ！」

「響たちだな……」

祐介は迷惑そうに呟く。

「それは確かな情報じゃない」

「おい、」

中央収容所の看守が口を開いた。

「お前には2つの選択肢しかない。ここで斬られるか、中央に移る
かだ」

「この悪魔……！」

魔族の男は看守を睨み付けていたが、やがて諦めて牢の外に出てきた。

反魔法物質の詰まったトラックの荷台に4人が乗ると、看守はさ
つさとトラックを出した。

「中央に行った魔族は、どうなるんです？」

モニタールームに戻ると、信治は早速祐介に訊いた。祐介は仕方な
さそうに答えた。

「ぶっちゃけ、分からないんだ。あそこのことは、あそこの人間し
か知らない」

「じゃあ、富田さんが言ってたっていう話は……？」

「ここの看守の間で出た、1つの推測だ。もともと、推理できるほ
どの情報はないんだけど。ただ、地方の収容所からちよくちよく囚
人を集めているのに、全くいっぱいになる気配を見せず、出てくる
囚人もいない、ってなるとな……。そういう推測も出てくる」

「そんな……！」

驚くと同時に、信治は気が付いてしまった。次に連れていかれるのはあの少女であるということに。

「前にも言っただけ、余計なこと考えんな。自分が苦しくなるだけだぞ」

信治の狼狽える様子を見て、祐介が言う。

「全く……ホント、何でこのタイミングで来んだよ……」

8 決意

「ここを出よう」

中央収容所の看守が来た、その翌日のことである。少女は驚いて信治を見上げた。

「次に中央の看守が来たら、君は連れていかれる。その前に、逃げるんだ」

信治は努めて、声を潜めて話した。しかし焦りは隠せず、早口になった。

少女は呆然として、信治を見上げている。それを見て、信治は、自分があまりにも唐突に、無茶苦茶なことを言っていることに気づいた。

「……ごめん」

「……いえ、ちょっと吃驚しましたけど」

少女はようやく冷静さを取り戻したようだった。

「危ない賭だつてことは分かってるんだけど……」

「行きます」

「えっ？」

今度は信治が驚いた。

「行きます。私、こういう形で外に出ることになる可能性も考えてましたから、覚悟はできてます」

「……………」

あまりにも落ち着いた彼女の返答に、提案した信治の方が動揺してしまった。

「いつ、外に出られるんですか？」

「あ、ああ……」

信治は気持ちを落ち着けながら、

「明後日の朝食を配る時に、俺が牢の鍵を持ってくるよ」と答えた。

本当は、もつと急ぎたかったが、明日は休日であった。さらに、安全に脱獄する、という点においても、明後日は良くなかった。朝食を配る時間が、勤務の交代時間ギリギリの7時なのである。次の時間に勤務する看守たちと鉢合わせする可能性が高く、そういう意味で、危険だった。しかし信治は、それを避けるために決行をもう1日遅らせることが怖かったのだ。

「分かりました」

少女は頷いた。

「でも、あなたこそ、いいんですか？」

「え？」

「魔族の脱獄に手を貸したってなったら、あなたもただじゃ済まないでしょう？」

「うん、まあね……」

信治は苦笑する。

「でも……でも、俺はもう、ここにいるのが辛いんだよ。それに君には悪いんだけど、これは、俺が行動を起こすのにも良い機会なんだ。俺、こういう機会でもなきゃ、動けない人間だからさ」

「そうですか。それならいいんですけど……」

休日間に、信治は1つの結論に辿り着いた。「看守に選ばれる条件」についてである。奏は「優秀だから」と言っていたが、おそらくそれは、表向きのものではない。実際は、軍にとって扱いやすい人間が、看守に選ばれるのだ。

（今回俺を選んだのは失敗だったけどな）

と信治は思う。

（俺はこのまま黙って軍の言いなりになるのは嫌だ）
彼は自分の気持ちをはっきりさせた。そうしなければ、途中で自分の気持ちが揺らいでしまいそうな気がした。

そして、その日はやってきた。信治は努めて、いつも通りにしていた。祐介も、特に怪しむような様子は見せなかった。

やがて、朝食を配る時間がやってきた。

「時間だ。とっとと済ませちまおうぜ」

「はい」

祐介は先にモニタールームを出ていった。信治は、彼女とその近くの囚人たちの牢の鍵を取って軍服のポケットに入れ、祐介の後を追った。

信治は牢獄に入ると、すぐに少女の牢の前で鍵を取りだした。

「今開ける」

「はいっ」

さすがの彼女も、少し緊張気味だ。

「大丈夫。きつと上手くいく」

言いつつ彼女の牢を開け、隣の牢に他のいくつかの鍵を投げ込む。

「悪いけど、あとは自分たちでやってくれ」

「誰も頼んじやいないがな」

その牢の中にいた男は言ったが、その鍵を手にとった。

「よし、行こう」

信治は少女に囁いた。少女は黙って頷く。

「どこへ行くんだ？」

信治ははつとして声の聞こえた方を見た。祐介が腕を組んで牢獄の出入り口に立ちふさがっている。

「……どいてください」

信治は平静を装って、静かに言った。

「そんなことしたって無駄だ。やめろ」

祐介も静かに、だが強い調子で言う。

しかしもう、信治に退くつもりはなかった。

「どいてください。伊藤さんとは戦いたくない」

「ここを出られたとしても、すぐに他の軍人に捕まって終わりだ」

「やってみなきゃ分かりません」

信治は声を揺らさないように、はつきりと言う。

「やるまでもないさ。結果は見えてる」

一方の祐介も、一定の調子で話し続ける。

「俺は絶対に負けません」

「お前は国を相手にしようとしてるんだぜ？分かってる？」

「それでも、俺は彼女を助きたい」

「その子のために、国と戦うってえのか？」

祐介は剣を構えた。

「そうです」

信治も剣を構えた。

「……あ、そう。じゃあ、やってみな」

祐介はそう言って、構えを解いた。

「えっ？」

「そこまで腹が決まってるのなら、もう止めやしねえよ」

祐介は苦笑しながら言った。

「ただし、巻き添えはごめんだな。俺はお前に全部の罪押しつけるから」

「……ありがとうございます」

信治は祐介に向かって頭を下げてから、少女と共に牢獄を出た。

走りながら少女に問う。

「この後はどうしたい？君の住んでた所まで連れていこうか？」

少女はクスツと笑った。

「何言ってるんですか。私もあなたと一緒に戦いますよ」

「えっ!？」

「変えなきゃダメですよ、国を。だから、私も戦います」

信治はしばらく啞然として少女を見ていたが、やがて少女と同じように笑った。

「そうだな。ここまできたら、国を変えてやるか！」

収容所を出た2人は、軍の寮に向かった。

一方の祐介は、牢の鍵を片っ端から開けていた。

「何やってんだ、お前？」

少女の隣の牢にいた男は、呆れた様子で訊いた。

「てめえらのお守りしてんのが面倒くさくなっただんだよ」

祐介は本当に面倒くさそうに言った。

「そんなことしたら、お前も無事じゃ済まなくなるだろう？」

魔族が次々と外へ出ていく中、男は祐介に言う。

「さつきも言っただろ？罪はあいつに持ってたもらう。俺はあいつが放った大勢の魔族に襲われて気絶したんだよ」

「最低だな」

牢獄に残っているのは、もう魔族の男と祐介だけだ。

「賢いって言うてくれ」

祐介は不愉快そうに返した。

「お前もとつと出ていきな。目障りだ」

男は出ていこうと体の向きを変えたが、すぐに振り返った。

「その剣貸せ」

祐介は黙って腰に携えていたそれを渡す。男は剣を抜くと、祐介の左肩に向かって突き出した。肩に傷を負った祐介は、牢獄の奥の壁に寄り掛かって、そのまま座り込んだ。

「サンキュ」

祐介は少しだけ笑みを浮かべて言った。

「ふん、」

男は剣を放りだした。

「人間に借りはつくりたくないからな。これで貸し借りなしだ、若造」

信治と少女は、ようやく寮に辿り着いた、が。

「何、これからデート？」

雅也だった。邪悪な笑みを浮かべながら、剣を抜く。

「これは、避けられないな」

信治も剣を抜いた。

「人間斬るのは初めてだなア！」

雅也が突然走りだし、信治に向かって剣を勢いよく振り下ろした。信治はそれを横に逸らし反撃に出ようとするが、雅也の小柄な体は、すぐにまた、攻撃の体勢をつくる。信治は身を守ることで精一杯だった。

「くそっ……！」

「お前弱いなア！これなら楽勝……！」

しかし突然、雅也の動きが止まった。足が凍らされたのだ。

「しまった、あの魔族かつ……！」

雅也はすぐに人工魔法で氷を打ち砕くが、信治が反撃に出るには、十分な間だった。

「ぐっ……！」

信治の剣が雅也の脇腹に入り、雅也は膝をついた。その隙に信治は寮に停めてあった自分の車に少女を乗せ、自分も乗り込む。

「待てっ……！」

雅也は立ち上がろうとするが、再び足下が氷に包まれる。

「ちつきしょっ……！」

信治はアクセルを一気に踏み込み、車はタイヤを空転させながら、寮を飛び出した。

「なんだア？うるせえな」

響が部屋から出てきた。

「北原が魔族の女連れて出てったんだよ……！」

雅也が負傷した脇腹を押さえながら言った。

「なに、お前。北原に負けたの？」

響がからかうように言う。

「うるせえよ。魔族に邪魔されたんだ」

雅也は響を睨んだ。

「まあいいや。収容所に言ってみようぜ」

雅也を心配する様子も見せず、響は収容所へ歩き出した。

響が収容所にやってくる頃には、牢獄にいた魔族たちはすでに全員脱獄していた。

「全部逃がしたのかよ、あいつ……」

牢獄の奥には、1人の看守が壁にもたれ掛かっていた。左肩を負

傷している。

「後輩に、まんまとしてやられちゃったわけね、祐介君？」

「ちっ！言い返せねえだけに余計腹立つ」

祐介は悔しそうに響から目を逸らした。心の中では、全く別のことを考えながら。

（さて、どこまでやってくれるのかな……？）

「助かったよ」

車を走らせつつ、信治は助手席に座る少女に礼を言った。

「いえいえ」

少女は恥ずかしそうに微笑んだ。

「よし、それじゃあ、まだこれからどうするかも分かんねえけど、頑張ろう！……えーと……」

ここで信治は、自分がまだ、少女の名前を知らないということに気づいた。

「……俺は北原信治っていうんだ。君の名前は……？」

せんじゅういんゆみか
「千住院由実香です」

由実香は頬を桜色に染めて、笑った。

1 由実香の話

信治と由実香は、アクネに入った。信治の実家に行くためだ。

信治はともかく、由実香は布に首と手が出せるように穴を開けただけの囚人服を着ている上に、風呂にも入っていないために髪もボサボサで、とても外を歩ける状態ではなかった。その問題を解決するために信治が提案したのだ。

（2人とも出掛けてりやあ、いいんだけど……）

いくら家族とはいえ、今の信治は反逆者である。そんな息子を2人が受け入れてくれるか、彼には自信がなかった。

幸いなことに、両親は出掛けており、家には誰もいなかった。

「よし。そしたら、風呂入って、母さんの服適当に出して着替えちゃって」

「はい」

「まあ、気に入らないかもしれないけど、この後買いに行くまでの間だけだから」

由実香はおかしそうに笑った。

「今着てるのに比べたら、どんな服でも素敵に見えますよ！」

サイズは多少大きいようだったが、由実香は楽しそうに服を選び、風呂場に入った。信治はなんだか落ち着かず、テレビの電源を入れる。

ニュースが放送されている。信治は由実香が風呂からあがってくるまでの間見ていたが、収容所のニュースは報道されなかった。ほっと息をつくが、考えてみれば、民間には知らせたくないニュース

だろうと思った。何しろ軍人が事件を起こし、逃亡したのだ。そんなニュースが流れれば、民間の不安を煽るばかりでなく、軍人が動きにくくなってしまふはずだ。

「収容所のこと、流れてますか……？」

由実香が不安そうに尋ねる。風呂に入って綺麗になった彼女の黒髪が、肩から胸の辺りに流れ落ちる。

「いや、まだ流れてない。大丈夫だよ」

とは言ってみたものの、軍の中ではすでに情報が広がり始めていると信治は踏んでいた。

「俺も風呂入ってくるよ。そしたら、服買いに行こう」

信治の予想は、当たっていた。まさにその頃、各地の軍人たちは収容所の事件の話を聞いていたのだ。

「うそ……！」

たった今受け取ったばかりの書類に書かれている名前に、奏は信じられない、といった様子で呟いた。

「第5収容所にいた魔族を全員解放……。けが人が2人か」

将太は冷静にそこに書かれているものを読んだ。

「信治がこういうことするとは、思わなかったな……」

「……私が、捕まえる」

奏は強く拳を握りしめる。

「こんなことして……絶対に許さない……！」

信治と由実香は家を出て、その近くにあるデパートで買い物をしていて。

「すごいですね、人間の世界の店って」

由実香は洋服売場の中を、あちこち見てまわっている。思わず信治は辺りを見回したが、近くには誰もおらず、ほっと息を吐きながら彼女に尋ねる。

「魔族の世界には、こういう店ないの？」

「ありますよ、服売ってるところは。でも、こんなに可愛い服とか、ないですもん」

「ふうん」

由実香は、不意に笑った。

「なんか、こんな時だけど……、すごく楽しいです！」

由実香は本当に幸せそうだった。

「そっか。それは良かった」

信治もつられて笑った。

ひととおりの買い物が進んだ頃には、空が赤く染まっていた。

「今のうちに、旅館とかで休んでおこう。俺、いいところ知ってるんだ」

信治の提案で2人は、街の外れにある、小さな旅館に泊まることにした。見た目は少々古ぼけた感じだが、静かな、落ち着いた雰囲気を感じ出しているその旅館は、信治のお気に入り、彼は何度もここに来ている。

「静かですね」

由実香もその雰囲気が入ったようだった。

部屋に入って夕食を済ませた信治は、由実香に話しかけた。

「あのさ……何から訊けばいいのかわからないんだけど……君たちの歴史を聞かせて」

「分かりました」

由実香は頷いて、話し始めた。

「……そもそも私たちの歴史は、スタートが違います」

「スタート？」

由実香はまた頷く。

「人間は、自分たちに都合のいいところだけを切り取って伝えてるみたいですね。確かに魔族が人間を支配してたのは事実ですけど、その前に人間が魔族にしてきたことを伝えないのはずるいと思います」

「魔族による人間支配時代の、前か……確かに俺らは知らないな」

「まあ、その時はまだ、今の『魔族』ではなかったから、人間は無視してるのかもしれませんがね」

由実香は苦笑する。

「でもそれが『原点』だと私は思うんですけどね」

「何、どういうこと……？」

「つまり、その時人間に仲間はずれにされた人間が、今の魔族だつてことです」

「えっ!？」

「これ、知ってますよね？」

由実香は自分の目を指す。彼女の瞳には、2つの「^{かき}」を組み合わせたような、不思議な模様が浮かんでいる。

「うん。魔族の目には、必ずその模様があるんだよね？」

「そうです。でも、正確には、『魔族だからこれがある』んじゃないくて、『これがあるから魔族』なんです」

「？」

「最初はちょっとした変種みたいなもんだつたんですけど……まあ、怖かったんでしょうね。その人間たちは『魔族』とか言われて差別されてたそうです」

「……」

信治は拳を握りしめた。幼い頃から教えられてきたからとはいえ、魔族が悪魔だと本気で信じていた今までの自分に腹が立った。由実香はそんな信治を悲しそうに見ていたが、話を続けた。

「差別を受けた『魔族』たちは、人間たちとは別のコミュニティを作りました。そうしてその変種の血が濃くなっていった結果、彼らは『魔法』を手に入れたんです」

「魔族を誕生させたのは、人間……」

「魔法を手に入れた魔族は、自分たちを蔑んだ人間たちに復讐しました。……しかし、やりすぎたんです。その結果、魔族が逆に人間を蔑み、支配している社会ができあがった……。ここから先は、信治さんも知つての通りです」

「人間は……魔族と同じことを繰り返そうとしてるんだな……。いや、それ以上か。今度は魔族を殲滅しようとしてるんだから……」

「『憎しみの連鎖』ってやつですね。そしてそれは繰り返す度に強くなっていく……。もしかた形勢が逆転するようなことがあれば、魔族も人間を滅ぼそうとするかもしれないね……」

「ここで終わりにしなきゃ……！」

信治はさらに強く、拳を握りしめる。

「そうですね。終わりにしましょう」

由実香も信治の言葉に大きく頷いた。

2 ぶつかる思い

由実香の話が一段落すると、2人は就寝の準備を始めた。時間はすでに午前1時。

「もつと聞きたいけど……まあ、焦ることもないか。寝よう」

「はい……」

由実香は欠伸をしながら返事した。

相当疲れていたようで、彼女は布団に入るとすぐに寝入ってしまった。静かに寝息をたてて眠っている由実香は、人間の少女と全く変わらない。

「絶対、魔族にとっても暮らしやすい国に変えてやるから……」

信治はそう呟き、自分も布団に入った。

しかし、ぐっすりと眠ることはできなかった。2階にあるこの部屋の真下……ロビーに数人の人間の気配を感じたためである。時計に目をやると、時間はまだ3時過ぎだ。

（こんな早くに、何の用だ……？）

しばらくすると、下にいた人間たちが階段を上る音が聞こえてきた。そして足音は、どんどん信治たちの部屋に近づいてくる。

「由実香……、由実香」

やむなく、信治は由実香を起こす。彼女は眠い目を擦りながら起き上がって……、足音に気づいたようで顔を強張らせる。

足音は、2人の部屋の前で止んだ。2人は部屋の奥……窓際までさがっている。事情を説明してマスターキーを借りたのだろう。鍵があけられ、扉がゆっくりと開いた。

「……奏」

現れたのは、信治のよく知る人物だった。その後に将太が続く。他の隊員は外で待機しているようだ。

「アクネに来てるなら、多分ここだなんて思った。信治のお気に入り旅館だからね」

奏は淡々と話す。

「……」

「信治、大人しく捕まって。あんまり手荒な真似、したくないから」

「……由実香」

信治が呟く。由実香は頷いた。

「！」

突然、奏と将太の前に、大きな氷の壁が現れた。

「信治ッ！」

信治と由実香は窓から外へ出た。由実香が氷のスロープを作り出し、一気に下に滑り降りる。が、すぐに奏が追ってきた。

「逃がさない！」

奏は抜いた刀を一旦鞘に戻し、得意な抜刀術の構えをとる。次の瞬間、高速の斬撃が信治を捉えた。

「……ッ！」

信治はとつさに剣を抜き防ぐが、その力に弾き飛ばされる。

「信治さんっ！」

由実香が魔法を使おうとするが、そこに将太が斬り込んできた。由実香は短剣で受け止めるが、使い慣れていないため、力のある将太の剣に弾き飛ばされた。

「将太たちはその魔族をお願い！私は信治を捕まえる！」

2人を分断した奏は、将太たちに指示すると、信治に向かっていった。

「了解」

将太は他の隊員たちと共に、由実香を追いつめていく。由実香は旅館を背に、将太たちを睨む。

「抵抗しないで大人しく捕まれば、死なずに済むかもしれないねぞ？」
将太が警告する。由実香は旅館を一瞥する。

「魔法は効かねえんだ。お前、他に何が出る？」

「魔法は効かないんですよ」

「？」

将太が怪訝そうな顔をする。由実香は少し躊躇っていたが、
「ごめんなさいっ」

氷塊が旅館の窓を叩き割った。軍人たちは一瞬驚いてひくが、割れたガラスは由実香の側に落ちて大きな音を立てただけだった。

「パフォーマンスとしては派手だけどな……。それで終わりか？」

「いえ、始まりです」

由実香の周りの地面から、氷の柱が伸びる。

「さっき言ったこと、聞こえなかったか？魔法は効かねえんだ」

「聞こえてますよ」

氷の柱が砕けて、将太たちに降り注いだ。

「慌てんな！人工魔法使え！」

叫びつつ、将太も自分に向かって飛んできた氷塊を叩き斬る。氷塊は跡形もなく消え去った、が。

「っ……！」

頬を掠めたそれは、ガラス片だった。

「こいつ……！」

「私は負けません」

由実香の目には、静かに怒りの炎が燃えていた。

一方、信治は奏の剣術に完全に押されていた。

「信治が私に勝てるわけないでしょッ!？」

奏の斬撃が信治を撥ね飛ばす。

「ぐッ……！」

奏の武器は、抜刀術に代表される高速の斬撃だ。さらに彼女の抜刀術は、速いだけでなく力も乗っている。それこそが、彼女が女性の軍人としてはトップクラスの実力を持つと評され、小隊長を任されている所以である。信治は守りに重きをおいた戦い方を得意としているが、相手が奏であつてはその守りも大して役に立たない。

「諦めて、信治。死にたくないでしょ？」

荒い息遣いをしながら自分と対峙している信治に向かって、奏は言つた。

「……奏、知ってる？魔族が、元は人間だつたつて」

「何言ってるの？」

奏は怪訝そうな顔をする。

「魔族は人間を支配していた。でもその前に、人間が魔族に酷いことをしてたことは知ってる？」

「知らない」

奏は素直に答える。

「俺たちは大事なことを知らないまま、戦ってるんだよ！」

信治は奏に訴えかける。しかし奏は、冷めた様子で返す。

「あの魔族に、変なこと吹き込まれたつてことね」

「そんなこと言つてねえだろッ！」

「信治……自分が騙されてるのに気づかないの？」

「違う！騙されてるのは奏の方だ！」

「……ダメか。信治、本当に最後の警告。大人しく捕まつて」

今度は奏が信治に訴えかける。

「……できない。俺は、この国を変えるんだ」

その返答に、奏の表情が一瞬曇つた。しかしすぐにそれを消すと、

彼女は刀を構え直す。

「……それなら、私がここで終わらせる！」

奏の素早い斬撃が信治に向かってきた。

「ぐッ！」

なんとかそれらを逸らすものの、完全には避けきれず、信治の体には少しずつ傷が増えていく。

「くそっ！」

焦って大振りしたのがいけなかった。斬撃をかわした奏は、信治の視界から消えた。

「！？」

そして次の瞬間、背後に殺気を感じた。

（殺られる……！）

奏は一気に刀を振り下ろそうとしたが、一瞬わき起こった躊躇いの気持ち、その行動を遅らせた。

大きな金属音が響き渡る。信治の剣が彼の手を離れ、数メートル後ろに突き刺さった。

「くっ……！」

取りに動こうとした信治の首筋に、奏の刀が当てられる。

「信治の負けだよ。諦めて」

信治は大きく息を吐く。

「……そうだな」

「分かったらそのまま手を後ろに……」

「『1人だったら』諦めるしかないな」

「何言つて……」

「奏危ねえ！」

突然将太が叫んだ。……と、上方から氷塊が降り注いだ。

「！」

人工魔法を使うが、中のガラス片が左手を掠めた。

「いつ……！」

その隙に信治は剣を取る。

「信治っ！」

しかしそこに再び氷塊が落ちてくる。奏はひいてかわすしかなかった。

「由実香っ！」

氷塊があちこちに降り注ぎ、隊員たちが混乱している中、信治は旅館の壁に寄り掛かって頭に手を当てている由実香を見つけた。

「信治さん……」

「助かったよ。行こう！」

彼女の手を引き、駐車場へと走る。

「もう……いいですか……？」

その意味が信治にはよく分からなかったが、苦しそうな由実香を見て、とりあえず頷く。

「いいよ。無理しないで」

彼女は大きく息を吐き出した。

「くそっ、追え！」

辺りに降り注いでいた全ての氷塊が突然消えたことに驚きながら、将太は叫ぶ。しかし信治と由実香は、すでに車に乗り込んでいた。

「いいっ！それよりすぐにみんなを集めて」

奏が叫んだ。

「多分信治は、私たちの管轄下……アクネを出す」

車が走り去った後、奏は隊員たちに言う。

「だろっな」

将太が同意する。

「……でも、私は追う。うちの小隊の人間が起こした不祥事だもん。私が片を付ける」

「元、だけどな。よし、俺も行く」

「え、将太に留守中のまとめ役を頼もうと思ってたんだけど……」

「俺だつて放つておく気にはなれないよ。どうせ戦闘もないし……よし、タンバ。お前しばらく小隊の臨時隊長やって」

「えっ、は、はいっ！」

将太にいきなり指名されて動揺しつつ、たんばみな丹波美奈は返事した。

「ごめん、ちよつとの間よろしくね」

奏は将太と車に乗り込み、美奈たちに言った。

（絶対に信治を止めてみせる……！）

同時に、心の中で強く決意する。

3 同志

アクネの西にある町、ウェルド。その町の東部に魔族掃討軍第1008小隊の活動拠点がある。

「昨日の早朝、イオリアの西部にある第5魔族収容所にて、収容していた魔族が全員脱獄するという事件があった」

小隊長の言葉に、隊員たちがざわめく。

「静かにしろ。……容疑者はその収容所の看守の北原信治だ」

隊長はその男の顔写真を隊員たちに見せる。

「現在、この男は魔族の女を連れて逃亡中だ。……そこで我々は、今日よりアクネとウェルドを結ぶ主要な道路に警戒態勢を敷く。各自、これから指示する持ち場につくように！」

「はい！」

隊員たちは気を引き締めたようだった。

「そうだ、それから……上田瑞紀！」
うえだみずき

「は、はい！」

「お前は第8魔族収容所へ異動になった。近くだが、ここにある荷物まとめとけ」

「あ、はいっ！」

「よし、それでは、それぞれの持ち場を指示する」

隊長の指示が済み、隊員たちが解散した後、瑞紀は休憩室に入った。部屋には彼女以外、誰もいなかった。……と、1人の男が部屋に入ってきた。

「いいの？行かなくて」

瑞紀が問う。

「ああ。俺の担当、明日だから」

男……若松啓太は答えた。わかまつけいた

「やったな。狙い通り、第8収容所」

瑞紀は頷く。

「うん。……だけど、先越されちゃったね」

「うーん、そうなんだよなあ……。これで警戒レベルは間違いなく上がったはずだから……」

啓太は溜息をつく。

「いっそ、その……北原信治って人に協力を要請してみたらどうか
な……？」

瑞紀が提案する。

「そうだな。向こうだって、仲間ほしいだろうし。……よし、じゃあそれは、俺がなんとかするよ。瑞紀は……、アズサのこと頼む」

「分かった。とりあえず、アズサに会ったら連絡入れるね」

「ああ、頼む」

翌日。啓太は、自分の持ち場からは少し離れた丘の上にいた。

しばらくすると、無線連絡が入った。

『こちら、アクネ・ウェルド境界付近！北原信治と接触しましたが、確保に失敗しました！北原は801号線を通っていきました！』

「801号線か……いい所行ったな」

啓太は丘を下りると、その道の真ん中に立つ。

やがて、1台の車がこちらに向かって走ってきた。啓太は両手を大きく広げる。

「止まってくれっ！」

車は、止まった。そして中から、剣を構えた男が出てきた。

「お前、北原信治だろ？俺は1008小隊の若松啓太だ。このまま行くと俺の仲間たちと鉢合わせして、面倒なことになるぜ」

「何でそれをあんたが言う？」

信治は油断なく剣を構えたまま、訊いた。

「……お前らに手伝ってほしいんだ」

啓太の言葉に、信治は少し意外そうな表情をした。

「ど……どういう意味だ？」

「助けたい魔族がいる」

「魔族を……助けたい？」

「ああ。……ここじゃすぐ見つかる。裏道に入ろう」

信治は、まだ構えを解かない。

「……信じてくれ。頼む」

啓太は信治の方へ剣を投げ、頭を下げた。そこでようやく、信治は構えを解いて、彼を車の助手席に乗せた。由実香は後部座席に移る。

「ありがとう。……50メートル先のところを、右に」

「……？道ないぞ？」

「そこだ、そこ。若干草が低くなってるだろ。この車でも走れないことはない」

「……」

しばらく進んでいくと、森の中に入った。

「……本当に大丈夫なのか？」

信治が不安げに問う。

「大丈夫。もう少し行くと、ちゃんとした道に出る。……でも、一旦この辺で止めてくれ。さっきの話を続ける」

信治が車を止めると、啓太は話し始めた。

「俺は、魔族の掃討が始まる前に、ある魔族と偶然出会ったんだ」

「魔族の支配時代か……」

信治の呟きに啓太は反論した。

「支配してたのは、ごく少数の魔族だけだ。ほとんどの魔族は普通に暮らしてただけだ……ってそいつは言ってた」

信治は由実香の方を見る。由実香は大きく頷いて見せた。

「……まあ、とにかく、俺はその魔族……六神むしんでんあずさ殿梓と知り合って……」

啓太はそこで少し口ごもった。

「？」

信治と由実香は顔を見合わせた。

「それで……まあ……俺らは付き合い始めた」

啓太はやつとのことと続けた。

「えっ……！？」

「それって、啓太さんと梓さんは恋人同士ってことですか……！？」
由実香が尋ねると、啓太は小さく頷いた。

「……なんだよっ、お前らだってそういう感じじゃねえのかよっ！？」

「えっ、いや……」

啓太の返しに、信治は曖昧に返事をし、由実香は俯いた。

「……まあ、それは置いて……、付き合い始めたと思ったら、これだ。梓は掃討軍に捕まった」

「……」

2人は黙って聞いている。

「俺は数年かけてようやく、梓のいる収容所を見つけたんだ。そして、あいつを助けるために軍に入隊した」
「なるほど……」

「今現在、俺はまだ収容所には行けてないが、俺の仲間が看守に任命されて、今日向こうに行った」

「仲間？」

「ああ。上田瑞紀っていうやつがいる。俺が梓と知り合ったのとは

ば同時に会ったやつだ。梓ともすぐに仲良くなって、3人で会うことも多かったな」

（3人、か……）

信治は、ほんの数ヶ月前まで共に働いていた、友人たちのことを思い出した。……今となつては、敵だが。

「もう梓は捕まってから数年が経ってる。急がないと中央に連れられちゃうんだ」

そこまで言うと言太は、2人に向かって深く頭を下げた。

「頼む！協力してくれ！梓を助けたいんだ」

信治は、由実香を見た。由実香は頷いた。それを見て、信治も頷き返す。

「……分かった。協力する。でも、そろそろお前、戻らないとマズイだろ。携帯で連絡取り合つて作戦立てよう」

「ありがとう！」

ちょうどその時、無線連絡が入ってきた。

『北原はどうした！？応答せよ！』

『こちらA2ポイント。北原は見つかりません』

『こちらC5ポイント。北原、現れません』

啓太も、それに続いた。

「こちらB8ポイント。北原は見つかりません」

その日の夜、勤務を交代した啓太が携帯を開くと、メールが1通届いていた。信治かと思つたが、送り主は瑞紀だった。件名は「梓に会えました」。

（よかった、無事に会えたみたいだな……）
メールを開いて、しかし啓太は固まった。

『梓に会えたよ。とりあえず病気にかかってたり、怪我してたりつてことはないから、安心して。……ただ、心の方がね……。助けに来なくていい』って言われちゃった……』

4 梓救出作戦【1】

信治がウエルドに現れた、その数日後。啓太は第8收容所の守りについていた。北原信治はこの收容所の魔族も解放しようと動くのではないか、という小隊長の判断であった。これによって收容所の守りは堅くなってしまった。しかし啓太にとっては收容所の側に働くことができたので、都合がよかった。外の守りにつかされ、中に入るできないことは、悔しかったが。

一方、收容所の中では、瑞紀が囚人たちに食事を配っていた。1人での仕事だったので、そのタイミングで梓に声をかける。

「梓、明日だよ。明日、外に出してあげるから」

しかし梓は返事をせずに、瑞紀に背を向けた。

（まあ、この前みたたく叫ばれるよかマシか……）

瑞紀は食事を置いて、梓のいる牢を離れた。警戒態勢が敷かれている今は、仕事から戻るのが遅いだけでも疑われる。自分のせいで計画を台無しにするわけにはいかない。瑞紀も、信治と由実香が梓の救出作戦に手を貸してくれることは既に啓太から聞いている。計画が失敗すれば、彼らにも迷惑がかかる。

（うーん、梓をなんとかしたいんだけどなあ……）

瑞紀は数日前に梓に会った時のことを思い出す。

「私のことなんか、放っておいてよッ！」

梓は久しぶりに顔を合わせた友人に向かって、そう叫んだ。

「えっ、何、どうしたの……！？」

「啓太は瑞紀といれば幸せなんだもん」

「はア！？」

「瑞紀もそういう『フリ』とかもういいよッ！」

「ちよっと待ってよ！」

慌てて瑞紀は反論する。

「誰もそんなこと言っていないじゃん！」

「じゃあ何で啓太は来ないのっ!？」

「それは啓太がまだ看守に任命されてないから……」

「適当なこと言ったって無駄だよッ！」

「嘘じゃないって！」

しかし何度言っても、梓は信じようとしなかった。

そして、至る現在。瑞紀は状況を変えることができていなかった。

『作戦の決行は明日の早朝』

啓太の言葉が頭の中で反響する。

(こうなったら、強引に引っ張ってくしかないか……)

日が沈み、辺りは暗闇に包まれる。そして再び空が白み始めた頃。

「……何だ、あれは……?」

軍人たちの上で、何かが光る。

「おい……落ちてくるぞッ！」

それは大量の氷塊だった。氷の刃は軍人たちに激しく降り注いだ。

「クソッ！魔族を探せ！近くににいるはずだッ！」

小隊長が指示を飛ばす。

(作戦開始、だな……)

氷塊を人工魔法で防ぎながら、啓太はその場で待機する。

軍人たちは分散して、近くの草むらに近づいていく……と。

「うわぁッ！」

軍人の1人が倒れた。そしてそこには剣を構えた男が1人。

「北原信治だ！確保しろ！無理なら殺してもいいッ！」

小隊長が怒鳴る。しかし氷塊が絶え間なく降り注ぐ中、小隊の動きは乱れている。

「どけえッ！」

信治が剣を大きく振って軍人たちと剣を打ち合わせる。

しかし、1対多である。四方からくる斬撃に信治は押され始め、すぐに防戦一方になった。信治が剣を大きく横に振って軍人たちを薙ぎ払い、薙ぎ払われた軍人たちの足が凍り付いたところを狙って斬り込むが、そこに別の軍人たちが斬りかかってくる、といった具合である。やがてそれも厳しくなってきた、信治は敵の斬撃を逸らすので精一杯、という状態まで追いつめられた。

「ぐっ……！」

「よし、殺れッ！」

小隊長の声が響き渡った。しかし、

「あアアッ！」

信治がいるところとは別の場所から悲鳴があがった。

「なんだ！？氷塊には人工魔法で……」

しかしそれは、魔法によるものではなかった。隊員の1人が、突然味方に向かって斬り付けたのである。

「啓太、お前何を……！？」

「自分のやりたいことやってるだけさ」

言いつつ、啓太は剣を大振りする。

「くそッ、陣形が乱れる……おい、中のやつらを出せ！」

小隊長は隊員の1人に指示を出す。すぐに収容所の中で待機していた隊員たちが外の戦闘に加わった。

「外が騒がしいねえ……」

看守の女が言った。しかし瑞紀はそれに対して何も返さず、モニタールームにある機械をいじり始めた。

「ちょっと、何してんの？」

「……」

……と、瑞紀は突然振り返って看守の鳩尾を打った。

「……ッ！」

さらに膝を折った看守の後頭部を打って気絶させると、瑞紀は作業に戻った。そしてそれを終わると、彼女は梓のいる牢へ向かう。

すぐに鍵を開け、牢の中で丸くなっている梓に呼びかける。

「梓、行こう！」

しかし彼女は、その場を動こうとしない。

「文句は後でいくらでも聞く！だから行こう！啓太も待ってる！」
焦る瑞紀がそう言っても、梓は動かなかった。

そうこうしているうちに、意識を取り戻した看守が、監獄に現れる。

「あんた……殺すッ！」

大きく剣を振りかぶりながら、瑞紀に突っ込んでくる。瑞紀も両手の短剣を構えて迎え撃った。

2人の看守が激しくぶつかり合っているのを目の当たりにしながら、しかし梓はそれを見ていなかった。

（魔族の支配なんてバツカみたい……！人間の復讐だって馬鹿だよ……！くだらない！）

彼女の思考はひねくれた方向へ進んでいく。

（瑞紀は私を裏切ったんだ！啓太も……！信じてたのに……！ずっと私を放っておいて、何を今更ッ……！）

そして彼女の思考は、1つの結論に達する。

（もう、何もかも消えてしまえばいい……！）

瑞紀と斬り合っていた看守は、梓の異変に気づいた。

「なっ、何……！？」

梓の周囲で火花が散っているのだ。

「そんな……ここには人工魔法物質が……」

動揺して動きが鈍った看守の腹を、瑞紀の短剣が捉えた。

「ああアッ！」

崩れ落ちた女に、瑞紀は言う。

「……さっきの私の行動を読んで、また人工魔法を起動されてたら、私も困りましたけどね」

「！」

しかし女が気づいた時には既に、梓の周囲は激しく燃え上がっていた。

（さて、この後どうする……！？）

瑞紀は自分に問いかける。

5 梓救出作戦【2】

地面が少し揺れた。

「今度は何だッ!?」

小隊長が叫ぶ。

「隊長！収容所がつ！」

「なっ……!!」

小隊長がそちらに目をやると、収容所から黒煙があがっている。

「くそッ、看守の中にも裏切り者がいたのか……!!」

地を揺らす爆発のような音はしばらく続き、やがてあちこちから煙をあげる収容所から魔族たちが現れた。

「ちッ……！逃がすな！」

しかし信治や由実香、啓太との戦闘で、小隊は混乱しており、ほとんどの軍人が動けない。やっとのことで行動に移った隊員たちも、大勢いる魔族たちには対応できず、逆に返り討ちに遭う始末である。

「梓っ！」

そのような戦いの中、啓太は梓を見つけた。しかし彼女の目に、光はない。

「梓……梓ッ！」

叫ぶ啓太に、梓は気づいたようだった。……と、彼女は突然、辺りを焼き払い始めた。

「梓ッ!?」

啓太の方にも、炎が襲いかかってくる。梓は彼の存在に気づいていないはずなのに。

「おいッ！どうなってんだ!?!」

信治が啓太に問う。

「分かんねえ……」

と、そこで啓太は、収容所から出てきた瑞紀に気づいた。彼女の軍服は、ところどころ焼け焦げている。

「どうなつてんだよ、瑞紀ッ!？」

炎を人工魔法で防ぎつつ、啓太は瑞紀に問う。

「多分、自暴自棄になつて……」

瑞紀は、呆然とした様子のまま、答えた。

「ある程度は予想してたけど、でも、ここまでやるなんて……、このままじゃ」

啓太は瑞紀の言葉に、弾かれたように梓を見る。梓は既に、息を切らしている。

「やべえぞ……早く止めねえと……!」

「え、何、どうしたの!？」

信治が問う。

「私が押さえ込んでみます」

信治の隣に来た由実香が言った。

「どうしたんだよッ!？」

信治がもう1度問う。

「魔族だつて魔法を無尽蔵に使えるわけじゃねえ」

啓太は短く答える。

「使いすぎれば死ぬ」

「え……!？」

由実香が梓を氷の壁で囲もうとする。しかし氷はあっという間に蒸発し、辺りを白く霧のように包んだ。しかも一気に蒸発したために、激しい爆風も巻き起こった。

「やッ……!」

由実香と梓は、その爆風に吹き飛ばされる。

「由実香!」

「梓っ!」

信治と啓太が走り出す。しかしその2人の前に、軍人たちが立ちふさがる。

「反逆者たちに死をッ！」

「狂っちゃってるな……！」

魔法を使つて逃亡を図ろうとする魔族たちに向かって、剣を振り回しながら突っ込んでいく隊員たちはもはや、「隊」の形をとっていない。

信治と啓太、そして瑞紀が軍人たちと戦っている間に、梓は再び暴れだした。

「ちつくしょッ、このままじゃ……！クソッ、どけえエッ！」

啓太は剣を大振りして軍人たちを薙ぎ払うが、彼らは狂ったようにすぐに再び向かってきた。

啓太たちが立ち往生している間に、梓は自分の上に火の玉を作り出す。

「もういらない……何も、いらないっ……！」

その火の玉は、徐々に大きくなっていく。

「まずいつ……！」

由実香は再び氷の壁を作ろうとするが、そこに軍人が剣を振り下ろしてきた。

「……ッ！」

とつさに短剣で受け止めるが、強い力に負けて転がされてしまう。

「ぐっ……！」

軍人の足を凍らせるが、また別の軍人が由実香に襲いかかってくる。

「あアッ……！」

軍人の剣が、彼女の短剣をはねあげた。

「由実香ッ！」

信治はめちやくちゃに剣を振り回して強引に道を開く。しかし何本

もの剣が、隙だらけになった信治の肩や脇腹や脚に入る。

「ぐッ……………」

武器をなくした由実香に軍人が迫る。

「どけえええッ！」

強引に周りの軍人たちをはね除け、信治は由実香に襲いかかろうとしている軍人に剣を振り下ろした。激しい血飛沫があがる。

「……………由実香ッ」

息を切らしながら、信治が少女の名を呼ぶ。

「信治さん……………ごめんなさい……………もう少しだけ、守ってください……………」

言いながら、由実香は氷で梓を足から包んでいく。

「守るよ……………ずっと」

自分の流した血や返り血で服を真っ赤に染めた信治はそう答えて、向かってくる軍人たちを迎え撃つ。

「……………」

自分を包んでいく氷に驚き、1度は魔法を弱めた梓だったが、

「うるさいっ、消えろ……………消えろっ！」

すぐにまた、炎を大きくしていく。徐々に巨大化していく炎の玉は彼女の周辺を焼き始め、由実香の作り出した氷もどんどん溶かしていく。

「……………っ！これ以上やると……………」

由実香は苦しげに言う。

「くそっ！梓ッ！」

今度は啓太が強引に軍人たちをねじ伏せる。隙だらけになった彼を瑞紀がフォローするが、体に刻まれる傷は増えていく。

「通せってんだよッ！」

なんとか軍人たちの間を抜けた啓太は、苦しげに息をする梓の両肩

を掴んだ。

「梓っ、やめろ！」

しかし梓は無視して魔法を使い続ける。

「もう……全部消してやる……！」

「馬鹿言ってんじゃねえよ！」

啓太は人工魔法のかかった剣を両手で構えて、炎に押しつけた。炎は一気に小さくなっていく。

「邪魔しないでよっ！」

炎が再び爆発的に燃焼する。人工魔法の力の方が追いつかなくなり、啓太の手にも炎が直接襲ってくる。

「邪魔してやるよッ！お前が馬鹿やめるまで何度でもなッ！」

梓は、少し揺れる。

「そんな……そんなことしてたら燃えちゃうよッ！死にたいのッ！」

「俺が死ぬ!?」

「そっだよッ！死にたくなかったら……」

「そんななんでもいいだろッ！」

「え」

「それよりお前が死んじまうだろうがッ！」

「な、何言っ……」

炎の勢いが弱まる。

「お前が死んだら……、お前が死んだらどうすんだよっ……！」

「……」

炎は、消えた。

「……っ、……っ！」

嗚咽が聞こえてきた。

「馬鹿っ……もうこんなくだらねえことすんな……！」

啓太はそっと、梓を抱き寄せる。

「今だ！殺れッ！」

炎の消えたタイミングを狙って、小隊長と数人の隊員たちが斬りかかってきた。

「！」

しかし直後、彼らの動きが止まる。足が凍り付いたのだ。啓太は渾身の力を振り絞って剣を振った。

「……俺、掃討軍辞めさせてもらいますんで」

啓太は、倒れた小隊長に向かって、言った。残った隊員たちが氷を砕いて啓太を斬ろうとするが、後ろからきた信治と瑞紀によって阻止された。

「……さて、どうやって逃げようか？」

信治が4人に問う。周りにはまだ軍人たちがおり、彼らは憎悪に満ちた表情で信治たちを睨み付けている。

「私に良い考えがあります」

由実香が言った。

「……えっと、梓さん、手伝ってもらえますか？」

梓は頷いた。

「……それじゃあ、行きます！」

由実香は軍人たちの上に大きな氷塊を作り出した。

「みんな、行くよ？」

梓の言葉に、他の4人は頷く。

「えいっ！」

梓の放った火炎が氷塊を一気に溶かした。強い爆風と共に水蒸気が広がり、辺りが白く覆われた。

「なっ……！あいつらはどこだ!？」

近くで爆発のような音や金属のぶつかりあう音が聞こえた。

「うわアッ！」

「どこだッ！？」

軍人たちは辺りを見回す。

しばらくすると、視界が開けてきた。しかし5人の姿は消えていた。さらに魔族もこれに乗じて逃亡し、あとに残っているのは逃げる途中で斬られた魔族や傷ついた軍人たちだけであった。

「よかった、無事だ」

少し離れたところに停めてあった信治の車は無事であった。5人はその車に乗り込む。

「ごめんなさい……」

後部座席に瑞紀、啓太と座っている梓は涙を流しながら謝った。

「まったくだ。次やつたらゆるさねえぞ」

啓太がぶつきらばうに、しかし優しさを含んだ声で言った。

「色々ご迷惑おかけしました」

瑞紀が信治と由実香に言う。

「いえいえ」

由実香は照れたように笑った。

「俺たちも、仲間が増えてよかったよ」

信治も笑って言った。

「……それより、これからどうする？」

「とりあえず、もう少し西へ行ってくれ。その辺りは山が多くて隠れやすいし、俺は裏道をたくさん知ってる。とにかく一旦休もうぜ」
啓太が提案する。

「そうだな」

車はウェルドをさらに西へ進む。

「あの車に乗ってんのか？」

丘の上にいる1人の男が問う。

「ええ。先ほど乗るところを目撃しました」

その男の隣にいるもう1人の男が答えた。

「怪我してないよな？」

「大丈夫だと思います。1人で歩けていましたし」

「なら、いいんだけど……」

男は走っていく車を見つめる。

「ようやく見つけた……。今行くからな、由実香」

1 休息

信治たちはウェルド西部にある山中で休息をとることにした。

「この格好じゃ、すごい目立つちゃうね……」

瑞紀の言葉に他の4人も頷く。梓の囚人服もそうだが、他の4人も血塗れになっている。町に出られる格好ではない。

「救急箱くらいは車にあります。まずは傷の手当てを」

由実香が言う。

「服は俺と由実香のがまだあるよ。サイズは合わないかもしれないけど、我慢して」

信治がそう付け加えた。

「梓、由実香の服着れんのかぁ？」

啓太がからかい口調で言う。

「なっ……、太ってるって言いたいのかっ!？」

梓が叫ぶ。

「別に？太ってるとは言っていないじゃん」

「言ったも同然だよっ!……そりゃあ、ちよーっと由実香よりは丸いかもしれないけどさぁ……」

梓は唇を尖らせた。

「大丈夫でしょ……。問題あったとしてもそれは身長でしょ」

瑞紀がフロアに入る。実際のところ、梓は由実香よりひとまわり体が大きいのだが、この場で必要なのは冷静な考察力ではないだろう。

「瑞紀はちっちゃいから、逆にブカブカじゃない？」

恩を仇で返すような一言を梓は口にする。

「ちっちゃい言うなっ!」

確かに由実香より背は低いが、人から言われると腹が立つ。

「まあまあ、それくらいで……」

信治が割って入る。彼らの基準になっている当の由実香は、にこにこ楽しそうにその様子を見ている。

「着替えには車使って」

「覗かないでよー？」

梓が啓太に突っ掛かる。

「覗いても面白くねえもん覗かねえよ」

「ムカツ……！」

一通りの作業が済むと、信治は戦いの中で気になっていたことを誰にともなく尋ねた。

「魔族が魔法使うのって、結構命がけなもんなの？」

「あー、そうでもないよ」

梓が答えた。

「えっ？でも啓太が……」

「あ、いや……そうじゃなくてね、」

梓が両手を振って否定する。

「私は命がけなの」

「？」

信治はわけが分からないというように首を傾げる。

「信治さんは知ってます？私たちが魔法使うために必要なもの」

由実香が代わって話す。

「知ってるよ。魔法物質と魔法支配能力だね？」

「そうです。でもこの2つ、どっちも持つてる量や高さに個人差があるんですよ」

「個人差……」

「まあ、運動神経とか、そういうのと同じです」

「ふうん」

「魔法は、魔法物質を多く持つてゐる人ほど、たくさん使えるんです。で、同時に、命のメーターっていうか……」

「命のメーター？」

「例えばさ、」

梓が続ける。

「魔法で同じ大きさの火の玉を1つずつ作っていくとすると、ある人は10こまで普通に作れたり、また別の人は20こまで作れたりするの。そしてこれがライフポイントでもあつてね、自分の限界を超えて作ろうとすれば……」

「命を落とす……？」

「そういうこと。なんか、魔族は魔法物質がないと生きていけないみたいでさあ……。全部を魔法で別の物質に変換しちゃうと、アウトになるみたい」

「魔族は魔法を持つてますけど、それ以外は人間よりも弱いんです。魔法物質はある意味、麻薬みたいなものなのかもしれません。快楽を得る代わりに他の全てを失うように。私たちの場合はそれが魔法であるっただけ。もっとも、私は魔法を使えて嬉しいなんて思つたことありませんけど」

由実香は溜息混じりに言う。

「私も。もし魔法物質に浸かるのを避けられるんだつたら、絶対自分から手のばしたりしないのに……」

梓も賛同する。

「……なんか、『魔法が使える』って、人間が思つてると違つて辛いことなんだね……」

信治は2人の魔族を見ながら呟く。

「そうだよ。大変なんだから！……つてちょっと話ズレちゃったなあ。それはとりあえず置いて……。つまりね、私は普通の魔族よりも、持つてゐる魔法物質が極端に少ないの。だから私は命がけになつちやうつてこと」

「なるほどね……。由実香は？」

「えっ、あ……私は平気です」

由実香は少しまごついたが、そう答えた。

「そっか」

「私みたいのはそんなに多くないよ。それに私と同じ人たちの中でも、魔法物質使い切って死んだ魔族なんてほとんどいないし」

「それでもお前、気をつけろよ」

啓太が言った。

「へへっ……うん」

梓は素直に頷く。

「ありがとう。教えてくれて」

信治は2人の魔族に礼を言った。

「いえいえ」

由実香はいつも通りの言葉を返す。

「どういたしましてっ」

梓も笑顔でそう返す。

「……さて、明日はこのまま西に行ってウエルドを出よう」

信治の提案に他の4人が頷き、5人は就寝の準備を始めた。

「何これ……」

奏の眼前にあるのは、焼け焦げた収容所である。その前には、魔族や人間たちが倒れている。

「大丈夫ですか……？」

奏は傷ついた軍人の1人に声をかける。

「あ、ああ……大丈夫です。救護班も、動いてますから……。あなたたちは……？」

「アクネの0309小隊の者です」

「アクネの……そうですか……」

「これは……北原、ですか？」

奏は少し躊躇いながら問う。

「ええ。この収容所の魔族も、ほとんど全員解放させてしまいました……」

「そう、ですか……」

「うちの小隊の1人とここの収容所の看守の裏切りもありましてね……隊は総崩れ。小隊長も……」

「……」

「北原はその軍を裏切った2人とここの収容所にいた魔族1人を連れて、5人で逃亡しました……」

「……ごめんなさい」

「え……？」

「奏、行こう」

将太が言う。

「……うん」

「あ、あの」

去ろうとする2人を軍人が呼び止める。

「はい、何でしょう……？」

「北原を追うのなら、うちの小隊に、まだ元気な連中がいるんで、連れていってもらえませんか？」

「えっ？」

「あいつら、隊長の仇を討つて言ってまして……。しかし1008小隊の立て直しには、しばらくかかりそうなんで……」

「……分かりました」

奏は頷いた。

（信治……自分が何してるか、分かってるの……！？）

彼女はかつての友人に、強く訴えかける。

2 想い

翌朝。信治たちはさらに西に向かって進んでいた。

「すごい揺れるなあ……お尻痛いつ」

梓が不平を言う。

「仕方ねえだろ。表通りにはウエルドの軍人たちがいるだろうし」
啓太が返す。

「それくらいは分かってるよ……。でもさあ」

「少なくともウエルド出るまでは我慢しろ」

啓太がぴしゃりと言う。

「お昼くらいに一旦休憩しよう」

信治が慰めるように言う。

そして約束通り、昼頃になって、彼は山中で車を停めた。

「よし。少し休もう」

「やたっ！」

梓は喜んで外に飛び出す。

「うーっ、気持ちいいっ！」

「子供かよ」

啓太が呆れ顔で言う。

「あっ、見て！綺麗な花がたくさん！」

梓は坂を駆け上がる。

「ちよつと、転ばないでよ？」

母親のように瑞紀が注意する。

「大丈夫だよっ！ねね、みんなも来て！すごいよ！」

梓のはしゃぎっぷりに少々呆れながら、4人は梓の後に続く。

平坦になっているそこには、たくさんの花が咲き乱れていた。

「綺麗……！」

由実香の声が弾んだ。

「ほんとだね……」

信治も同意した。そこは本当に美しい場所で、5人はしばし、逃亡している身であることも忘れて楽しい時間を過ごした。

「綺麗なところですね」

不意に声がして、1人の男が現れた。目には魔族の証が見られる。

「……誰だ？」

信治が剣を構えつつ、問う。しかし魔族の男は、彼を無視して

「由実香、迎えに来たよ」

と言った。

「迎えに来た……！？」

信治は由実香を見る。彼女は驚きを隠せないようであった。しかしそれはやがて、切なげな表情に変わっていく。

（そんな顔……それじゃまるで）

信治はそこで思考を止めた。

「由実香……、知り合い？」

そして由実香に直接問う。

「あ……、はい」

由実香の答えは少し齒切れが悪かった。

「由実香と俺は、恋人同士なんです」

男はそれをはつきりさせた。

「え……」

「ずっと探してて……。今日、ようやく会えたというわけです」

「恋人……なの？」

信治は再び由実香に問う。

彼女は信治から目を逸らして……小さく頷いた。

「別に……隠してるつもりはなかったんですけど……」

そう続ける声は、弱々しい。

「……」

「さ、由実香、行こう」

由実香は、少し迷っているようだったが、

「由実香」

もう1度呼ばれると、ゆっくりと男の方へ歩きだした。

「まっ……待てよ……！」

信治が声をあげた。由実香の足が止まる。

「まだ、終わってない……終わってないだろ……？この国を変える
つて、変えなきゃダメだつて、由実香言つてたろ？」

「……」

「由実香を守ってくださってありがとうございました」

丁寧な言葉と裏腹に、男の声の調子は強かった。

「だ……いたい、あんた今更出てきて何言ってるんだよ……！由実
香はその間ずっと寂しい思いしてたっていうのに」

信治自信、言いながら苦しい抵抗だと思った。瑞紀と啓太が俯く。

（分かってる。この人だつて由実香を待たせたくて待たせてたわけ
じゃない……）

「……うるせえな……」

信治の言葉は男の癪に障ったようだった。

「人が下手にでてりゃ、いい気になりやがって……。先に助けたか
ら、あんたの方が偉いつてか。ふざけんな」

「そういうことを言ってるんじゃない……。ただ、いきなり出てき
て……別れを惜しむ時間もくれずに由実香を引っ張ってくつていう
のは」

「いきなり出てきたのはあんたの方だろ！？それにあんたは由実香連れ回して、もう十分に俺が由実香と会う日を延ばしたじゃねえかよっ！ようやく特定した収容所に恋人がいなかった時の俺の気持ちがあんたに分かんのかッ！？」

男の周りで火花が散ったように見えた。

「……それでも……、いきなりこんなの、認められない……！」

いつそ悪者にされても構わない、と信治は思った。少なくとも、今日の前で複雑な表情をしている由実香とは別れたくない。

「それなら、力ずくで認めさせてやるよ……！」

男の周りで炎が燃え上がる。

「オサムっ、やめてっ！」

由実香が声をあげる。

「オサム……？」

梓が反応する。

「こうなったら……力ずくでも止める……！」

信治も剣を抜く。

「ちよつと、信治！？」

瑞紀が慌てる。

「まあ、こうでもしなきゃ、あいつ気が済まないだろうからな」

啓太はその隣で信治を見守る。

「来いよ。俺とお前の力の差、見せてやるから」

オサムが言った。

信治は一直線に突っ込んでいく。しかし大きな炎が現れ、彼に襲いかかってくる。

「！」

とつさに右にかわすが、炎はまるで生き物のように信治を追ってくる。

「なっ……！？」

あつという間に信治は炎に囲まれた。

「俺を、普通の魔族と同じだと思ふなよ」

「まだだっ！」

信治は大きく剣を振って炎を薙ぎ払う。目の前の炎は掻き消えた。

……しかし。

「……！？」

炎の壁は厚く、彼のひと振りでは魔法をうち消しきれなかった。

「熱っ！」

瑞紀たちの眼前には、激しく燃える炎しかない。

「梓の比じゃねえな……」

啓太が呟く。

「あつ……そうだっ！」

急に梓が声をあげた。

「あいつ、かぶらのみやおさむ鎚之宮修だ！上級魔族の」

「上級魔族って？」

啓太が問う。

「簡単に言つと魔族のエリート」

「ねえ、」

瑞紀が言った。

「信治助けなくていいの……？このままじゃ由実香も連れてかれちゃうし……」

「由実香が結論出す」

啓太は答えた。

「えっ？」

「この戦いには、由実香は賭かってねえよ」

「どうということ？」

梓も怪訝そうな顔をする。

「あいつが誰だろうと、由実香が行きたくねえって言えばそこまでだ。それは由実香自身が一番よく分かっている」

「じゃあ、この戦いは……？」

瑞紀が問う。

「我儘な男2人の喧嘩。だから俺らが加勢したら、たとえ勝ったとしても、この喧嘩は意味をなくす」

「よく分かんない……」

梓が唸る。

「理屈じゃねえんだ」

「くそッ……！」

信治は剣を振り回す。炎は一時的に弱まるが、すぐにまた勢いを取り戻してしまう。

「ちくしょオッ！」

剣を大きく振り下ろすと、道が開けた。しかしそれは、彼の力で切り開いたものではなかった。その証拠に、道の先には大きな火球を完成させた修がいた。

「終わりだ」

大きな爆発が起こる。

「信治ッ！」

瑞紀が叫ぶ。

信治は炎に囲まれた中でへたり込んでいた。人工魔法で防御したため、ダメージは軽い。しかし、圧倒的な力の前に為す術もない自分が、あまりにもみじめに感じられたのだ。

「人工魔法に救われたか。だが、これでとどめだ」

修が炎を操ろうとする、が。

「やめてっ！」

由実香が叫んだ。

「もうやめてっ……！行くから……帰るから……。だから、やめてお願い……」

由実香は、泣いていた。

「……由実香」

「……ッ！くそオツ！」

信治は立ち上がり、修に突進する。しかし火球を打ち込まれ、あっさりと倒される。

「くッ……そ……！」

地面に爪を突き立てる。

「……由実香に免じて、許してやる。……行くぞ、由実香」

修は踵を返して、山の奥へと歩いていく。

「……梓さん、瑞紀さん、啓太さん。ちょっとの間でしたけど、一緒にいられて楽しかったです」

由実香は手で涙を拭くと、梓たちに言った。表情は硬い。

「これで、いいんだな？」

啓太が訊く。

彼女は黙って頷く。

「……信治さん、」

由実香は倒れている信治に言う。

「収容所から連れ出してくれて、ありがとうございました。……さよなら……」

彼女は少し早口にそう続けると、修を追って走り出す。

「由実香っ」

信治が彼女の名を呼ぶ。

由実香は立ち止まって信治を振り返った。

「魔族も、人間も、どっちも幸せになれる国に変えてくださいね……！」

彼女は寂しそうに微笑む。その表情は、収容所で最初に彼女が見せたそれと同じだった。

由実香は、山の奥へと走っていく。
「待つ、由実香っ……！」
彼女は、もう振り返らなかった。

3 力

風が吹き抜ける。美しき草花を失った焼け野原を。

風に舞うのは色鮮やかな花びらではなく、黒い灰。

修が姿を消すと同時に、炎は幻のように消えた。そして草花のなくなった黒い地に、信治はへたり込んでいた。

「信治……」

瑞紀は躊躇いがちに声をかける。

「全く敵わなかった」

信治は呟く。

「あいつは、何だ……？」

「鎚之宮修。上級魔族だよ」

梓が答える。

「上級、魔族？」

「前に話したでしょ？魔族が持っている魔法物質や魔法支配能力には個人差があるって」

「ああ……」

信治は黒い地面を見たまま、相槌を打つ。

「上級魔族っていうのは、そのどちらにおいても優れている魔族のことだよ。毎年、その年に成人した魔族は検査を受けるの。そしてその時にある一定の基準を満たしていれば、上級魔族として認められる……」

「なるほど、『魔族のエリート』ってのはそういう意味か」

啓太が納得したように言う。

「魔族の社会は上級魔族たちで構成される『議会』によって統治されてる。力のない魔族にとってはちよつと苦痛だよ」

「実質、生まれた時点で身分が決まってるってことじゃねえか……」
「修の名前を知ってたのはどうして？あいつ有名なの？」
瑞紀が問う。

「いや、そうじゃなくて……、私が人間に捕まった、その年にあつた検査で上級魔族になった魔族の中にあいつもいたから、覚えてたの。最近はその強い魔族が少なくなってきたて、その年に上級魔族になれたの、修入れて4、5人くらいだったし」
「なるほどね」

「まあ、大体のことは分かった。……で、これからどうする、リーダー？」

啓太が信治に問う。

「……」

信治は答えない。

「ここでじつとしてたつて由実香は帰って……」

啓太は辺りを見回す。

「……誰だ？」

足音が近づいてくる。

「あつ……、しまった！」

瑞紀が空を見上げて声をあげる。今もまだ、空に向かって黒煙が上がっていた。

「まさかそつちから居場所を知らせてくれるとは思ってなかったよ」
坂をのぼってきたのは奏だった。

「ちッ……！」

啓太が剣を構える。奏の後に続いて将太と1008小隊の隊員たちが現れたのだ。

「今度こそ捕まってもらうから。……って、ん？」

奏は辺りを見回す。

「どした？」

将太が問う。

「氷の魔族はどこ？」

奏は信治に向かって言った。

「……」

信治は答えない。

「不意打ちしようつたって、無駄だよ」

「いない」

信治が呟く。

「え？」

「由実香は、いない」

奏は怪訝な顔をした。

「いない？何で」

「……」

信治は再び沈黙した。

「まあ、いないならいいか、逃げたにしても1人じゃ何もできないだろうし」

奏はそれ以上の詮索をやめた。

「そんなことより私は、信治に借りを返さなきゃね」

奏は抜刀の姿勢をとる。

「『そんなこと』？」

信治が立ち上がった。奏は少し怯む。彼の様子がいつもと違う気がしたからだ。

「お前にとっては『そんなこと』かもしれないけどなア……！」

そこで奏は、自分が地雷を踏んだことに気がついた。

次の瞬間、信治はいきなり剣を抜き奏に向かって斬り込んできた。

「……ッ！」

奏は攻めるタイミングを失い、信治の剣を受け止める。

「俺にとっては重大なことなんだよオッ！」

剣にのる信治の力が強くなる。奏は押されて1歩下がった。

「……ッ！知らないよッ！」

奏は強く斬り返し信治の剣を弾くと、今度は自分から斬り込んでいく。勢いのある斬撃を受けきれずに信治は弾き飛ばされる。

「将太ッ！」

「分かつてる。手出しすんなだろっ？」

将太は答え、

「俺らはこっちの3人担当だ」

続けて1008小隊の隊員たちに言う。彼の指示を受けて、隊員たちは啓太たちに斬りかかっていく。

「やるしかないか……！」

「馬鹿、お前はさがってる」

梓にそう言つと、啓太は剣を抜く。

「消耗して動けなくなったら逃げられなくなるよ」

瑞紀もそう言つて2本の短剣を抜く。

「え、でも……」

「逃げる時にお前の力がある」

啓太がつけ加える。

「信治の指示が出たら、すぐ頼むぞ」

「……うん、分かった」

梓は素直に啓太たちの後ろに下がる。

「信治の方のケリつくまで持ちこたえるぞッ！」

啓太は突っ込んできた軍人に向かって剣を振り下ろす。

「……」

奏は戸惑っていた。信治の動きがいつもと全く違うのだ。剣を力の限りに振り回して、とにかく斬り込んでくる。奏が弾いて反撃しようとしても、守ろうとはせずに攻めてくる。

（これ……ホントに信治……！？）

攻め方は乱暴で、隙をみて奏が刀を振るうのは造作もなかった。奏

の刀は確実に信治の左肩を捉えた。

「信治ッ！こんな戦い方……」

しかし信治は怯まなかった。左手で奏の胸倉を掴むと、右手に握った剣を振り下ろそうとする。

「ッ！」

奏は信治を振り払うと刀を構え直す。……が、彼はすぐに起き上がるとまた乱暴に斬りかかってきた。奏は受け止めて反撃する。奏の刀は信治の右腕を掠めた。それでも信治は攻撃の手を緩めない。

（な……何なの……！？）

彼女は恐怖を感じていた。そしてそのために、隙があっても攻められなくなっていた。

（……ッ！何やってんだ、私……！）

奏は焦りを感じて踏み込んだ。彼女の斬撃は信治の腰の辺りに入った。しかし、彼女らからぬ、勢いのない中途半端な攻め方であった。次の瞬間、倒れながら放たれた信治の斬撃が奏の頬を掠めた。

「！？」

信治は尻餅をつく形で倒れる。奏は頬に手を当てた。そしてその手をじっと見る。確かに彼女の血液が流れ出ていた。

信治は再び向かっていこうと立ち上がる。が、足が止まる。

「な……」

奏は手を見つめたまま、涙を流していた。

奏は、自尊心の強い人間だった。そしてそんな奏は、信治に負けるどころか、剣を掠めることすら許したことがなかったのだ。奏は信治よりずっと強いはずだった。それが、訓練と同じ1対1の戦いで、崩れた。

本当に小さな傷。しかし彼女のプライドを傷つけるには十分なも

のだった。奏は膝から崩れ落ち、声を出さずに泣く。

「……なんだよ……」

信治の怒りは、どこかへ消えてしまった。

「そんなの……卑怯だろ……」

信治は山の上の方を見る。奏と戦っている間に、啓太たちと離れてしまっていた。

「卑怯だろ……」

もう1度呟いてから、信治はポケットに入っていたものを奏に投げて、啓太たちの元に向かった。

奏は涙でぼやける視界の中で、膝の上に投げられたものを見る。

ハンカチだった。視界がますますぼやける。

「こんなの……ずるいよ……」

坂を駆け上がってきた信治は、軍人たちと激しく斬り合っている啓太たちを見つけた。

「梓ッ！」

それだけ叫べば、十分だった。梓はすぐに、火の玉を辺りにまき散らす。

「奏はッ……!？」

将太が思わず口走ったのがまずかった。隊員たちに不安が伝染する。辺りで燃える炎も彼らの心を煽り、隊が混乱する。

「どけエッ！」

信治は腰の引けた軍人たちに向かって斬りかかる。道は、あっさり開かれた。啓太たちもそれに続く。

「馬鹿ッ、追うぞ！」

「でも、奏隊長は……！！？」

「……ッ！お前ら追えッ！俺も後から行くッ！」

信治たちは山を駆け下りる。しかし車は破壊されていた。

「表だ！こうなったらどこにいても変わらねえ！」

啓太が叫ぶ。

「あ、車みつけ」

梓が言う。

「馬鹿、動かせねえよ。あいつらのだ。焼いとけっ！」

「分かった！」

表通りに出ると、啓太は以前にやったように1台の車の前に立ちふさがった。

「！」

運転手は急ブレーキをかけて彼の前で止まった。

「わりい、車貸して」

言うが早いか、啓太は剣を抜こうとする。

「ひいっ」

運転手が車を降りて逃げる。

「ごめんなさいっ」

瑞紀が運転手に向かって深々と頭を下げている間に、他の4人は車に乗り込んだ。

「瑞紀、行くぞ！」

啓太が叫ぶ。

「うん！」

「くそッ！」

軍人たちは焼けた車の前で立ち尽くしていた。

「早く車呼べッ！」

一方将太は、山を少し下りたところで奏を見つけた。

「無事みたいだな」

奏はへたりこんではいるが、頬に傷があるだけだ。

「……将太、」

奏はいつになく静かに言う。

「ああ、悪い、また逃げられた。けど今1008小隊のやつらが……」

「違う」

奏は懷から短剣を取りだして右手に持つと、左手で結ばれた長い髪を持った。

「あ、おい……」

長い髪を無造作に切った奏は将太を見る。

「私、師せんせいのところに行くてくる」

「え？」

「今の私じゃ、ダメだ。だからもう1度訓練し直したい」

「……」

「将太も、来る？」

奏は問う。

「……いや、俺はいい」

将太はかぶりを振った。

「そつか。じゃあこれ……」

奏は襟についていた階級章をとって、将太に差し出した。

「預かってて」

「え、いや、それは……」

「それも今は邪魔なの。お願い」

「……分かったよ」

将太は溜息をつきながら、それを受け取った。

「ありがと。……将太は信治を追う？」

「ああ」

「分かった。気をつけてね」

将太は奏を残して山を下りていった。

奏はしばらく落ち着かない様子で短くなった髪を弄んでいたが、

「……よし」

携帯を取りだした。

「信治、これからどうするの？」

車の中で梓が訊いた。

「もう1度由実香に会いに行く。あんな表情した由実香とこのまま別れたくない」

「えっ、でもそれってことは修と戦うってことでしょ……！？」

「そうなるね。でも今のままじゃ絶対勝てないってことはよく分か
つてる」

「それじゃあ、どうするの？」

「……俺を鍛えてくれた師のところに行って、もう1度鍛え直して
もらう」

「そっか。そうだね。強くなればいいんだよね。……私も強くな
りたい」

「よし、じゃあ、その師のところに行くとするか。……で、その人は
どこにいるんだ？」

啓太が問う。

「このまま西へ。今はオルガの東部にいる」

信治たちの乗った車は、ワールドを出ようとしていた。

4 アクネにて

アクネの中心部には、魔族掃討軍の主要な施設が集まっている。

「魔族中央研究所」も、そのうちの1つである。

「よつと」

「おい、気をつけろよ」

5人の男たちが、その研究所に忍び込んでいた。

「……しかし、あんたもそうとう変わってるな。掃討軍の抵抗勢^{レジスタ}力でもなきゃ、何でこんなところに来るんだ？」

抵抗勢力の一員で、4人の中のリーダー格の男が、短髪の若い男に尋ねる。

「……興味、かな」

若い男は答えた。

「興味、ねえ……」

リーダーの男は、無遠慮にこの怪しい男を見る。彼らがここに忍び込む時に出くわしたのだが、軍の人間でも、抵抗勢力の人間でもなという。魔族でないことも、目を見れば分かる。
(まあ、妙な動きしたら斬ればいいか)

「それにしても、警備が薄いな」

若い男が言った。

「ああ。というか、全く人の気配がない……」

研究所の中は異様に静かだった。

「畏かもな」

「でも、だからといって帰る気はないんだろ？」

若い男が言う。

「ない。軍の新兵器に関する情報が手に入るまではな」

決して多くない抵抗勢力だが、数週間前にその情報を手に入れた。
「掃討軍が新しい兵器の開発に成功した」と。

「だけどさ……、何もないぜ？」

若い男の言う通り、辺りは綺麗に片づけられており、めばしいものは見あたらない。

「まあ、1番警備の薄いところ狙ってきたからな。こりゃあ収穫も少なそうだ」

「警備の人間はいませんが、収穫ありませんじゃ全く意味ねえなあ」

若い男はさして残念そうでもなく、そう言った。

しばらく進むと、大きな扉のある部屋に突き当たった。

「それっぽいな」

若い男が言う。

「ああ。覗いてみるか」

中はだだっ広い部屋だった。やはりこれといったものは見あたらない。ある1カ所を除いて。

「何で……女がいるんだ……！？」

人形のように可愛い少女が1人、部屋の奥に座っていた。

「しかも魔族だ」

若い男が付け加える。

「あ、また実験の人ですね」

魔族の少女がにっこりと笑う。

「実験？」

リーダーの男は怪訝な顔をする。

「新兵器を試してるんだそうです」

少女は笑顔のまま答える。

「新兵器……！なあ、君、新兵器がどんなものか知ってるのか……？」

「知ってますよ」

少女は笑顔を絶やすことなく、答えた。

「私です」

「はあッ！？」

抵抗勢力の男たちは、その意味が理解できずに固まった。

「私が、新兵器だそうです」

「ふうん、君が」

若い男だけが、冷静に応じる。

「どこが新しいの？」

「えへへっ、それはですねー、」

少女は立ち上がり、

「秘密ですっ」

悪戯っぽく笑い、右手の人差し指を顔の前で立てた。

「そりゃ、そうか」

若い男は大して気にした様子もなく、そう言った。

「こんなガキが新兵器だと！？笑わせるなッ！」

リーダーの男が叫ぶ。

「おい、あんなしょぼい新兵器、さっさと潰して帰るぞ」

抵抗勢力の4人は、少女に向かっていく。

「私も、ここに入ってきた人間は全員殺せって言われてます」

男たちの上に何本もの刃が現れる。

「！」

「鉄かな？」

若い男は相変わらず冷静な口調で問う。

「鋼です」

鋼の刃は男たち目掛けて落ちてきた。

「落ち着け！人工魔法だ！」

しかし、人工魔法が発動しているはずの剣は、それらの刃を普通に弾いただけだった。

「なっ……！？」

「うわアッ！」

抵抗勢力の1人の背に、刃が突き刺さった。

「クソッ！調子にのんなアッ！」

別の抵抗勢力の男が刃の中を抜けて少女の前まで来た。少女は攻撃をやめる。

「終わりだッ！」

男は剣を振り下ろしたが、彼女の前に現れた鋼の壁に阻まれる。

「このッ……！」

男は剣を何度も叩き付けるが、少女の盾はびくともしない。

「ダメだ、人工魔法が効かない……！」

……と、次の瞬間、少女の盾の一部が変形して、男の胸に突き刺さった。

「ああアッ……！」

「人間って弱いですね」

少女が最初と変わらぬ笑顔で呻く男に言う。しかしその後ろからまた別の抵抗勢力の男が迫ってきていることには気づかない。

（もらった……！）

剣は、入らなかった。やはり同じように鋼の壁に阻まれる。

「！？」

「うわ、吃驚したあ……」

少女は本当に驚いた様子を見せ、

「脅かさないでくださいよ」

3人目を斬り刻んだ。

「何なんだ……こいつ……！」

リーダーの男が呻く。3人の仲間たちは、既に動かなくなっている。
「人工魔法が効かないなんて……」

「だけじゃねえ。死角からの攻撃にも対応できるようになってる」
若い男が冷静に付け加える。

「どうする？逃げるか？……逃げるのも一苦勞だろうけど」

「うう……！」

リーダーの男は、恐怖でパニックを起こしかけていた。

「お……俺は逃げねえッ！」

リーダーの男は少女に向かって突っ込んでいく。

「あは、そうこなつくっちゃ」

再び刃が降り注ぐ。男はなかなか剣の扱いが上手く、刃を上手く逸らしてかわしながら少女に向かっていく。少女は攻撃をやめた。

「死ねエッ！」

男の力強い一撃は、少女の盾によって阻まれる。

「残念でした」

盾から刃が伸びる。

「ぐッ……！」

男はなんとかそらすが、1つが足に刺さった。

「あーあ。もうダメですね」

少女はそう言つて、若い男の方を見る。

「助けないんですか？この人」

「頼む助けてくれッ……！」

リーダーの男は足を地面に釘付けにしている刃を抜こうと必死になりながら、叫ぶ。

「うーん、助けてやりたいけど、俺正義の味方みたく強くないから。自分の命の方が大事だし」

「おいッ……！」

リーダーの男が悲鳴に近い声をあげる。

「そですか。酷いですねー」

そう言つて少女は、何の躊躇いもなく4人目を斬り刻んだ。

「……でも、あなたは助けてあげるなんて言つてませんよ」

「なあに、逃げるくらいはできるつもりで来たんだ。俺は危ない橋は渡らねえの」

若い男はそう返すと、少女に背を向ける。

「じゃあな」

「ムカツク人ですね」

少女は笑顔のまま、男に向かって刃を放つ。

「おお、」

男はかわすが、少女はさらに刃の数を増やす。男は剣を抜いて刃を逸らす。

「逃がしませんよ」

少女はさらに刃の数を増やす。

……と、男は突然踵を返し、少女に向かって突っ込んできた。

「！」

男は素早く少女の前まで踏み込むと、大きく剣を振った。少女の前に鋼の壁が現れる。が、壁は攻撃を受けて砕けた。少女は尻餅をつく。

「うッ……！」

少女はすぐに刃を放つて反撃する。男はそれをかわして後ろにさがった。

「魔法物質の改造か。やっかいだけど、完全じゃ、ないな」

男は再び少女に背を向けて歩き出した。

「殺さないんですか？あなたなら私を殺せるかもしれないのに」

少女が言う。少し前までの笑顔は消えており、今は不機嫌な様子で男を睨んでいる。

「さつきも言つたろ。危ない橋は渡らねえんだ。『もしかしたら勝てるかもしれない』で俺は戦わない」

男は振り向きもせずに答える。

「それに、俺がここで殺さなくても、お前はいずれ負ける」

「……名前訊いてもいいですか？」

少女は座ったまま言った。

すぎたそういちろう

「杉田総一郎。お前は？」

わたみしろなぎさ

「啍民城渚」

「そうか。じゃあな、渚」

総一郎は部屋を出る。

「おっと、帰すわけにはいかない」

部屋の外には十数人の軍人たちがいた。

「おわ、どこからわいてきたんだ？」

総一郎は面倒くさそうに言う。

「殺せ！」

隊長の指示で軍人たちは一斉に総一郎に斬りかかった。

「……うーんっ。なかなか面白い見学会だったなあ。次はどこに行こうかな……？」

総一郎は倒れている軍人たちを尻目に、研究所を後にした。

1 再会

ウェルドよりさらに西にある町、オルガ。その東部にある一軒家の前で、信治は車を停めた。

「ここに信治の師がいんの？」

啓太が問う。

「うん」

信治は車を降りる。

呼び鈴を鳴らすと、すぐに返事が返ってきた。

「どちらさん？」

少々無愛想な返事だった。

「北原信治です」

「ああ、信治か。ちょっと待ってる」

玄関の扉を開けて出てきた男は、「がっちりした体格の頑固爺さん」といった感じである。

「どうした？」

「……もう1度、師の元で訓練をさせてもらえませんか？」

「わかった」

男はあっさりと承諾した。

「えっ」

あまりにもあっさりとした返答に、信治が逆に動揺する。しかし男は「お前が来ようが来なかつても、俺はそうするつもりだったからな」と言う。

「は……？」

「後ろの3人は？」

怪訝そうな様子の信治を気にも留めずに、男は問う。

「信治と一緒に革命を起こそうとしてる……んっ！」

言いかけた梓の口を啓太がふさいで、自分の後ろに下がらせる。

「信治の友達の上田瑞紀ですっ」

瑞紀がフオローする。

「あと、若松啓太と六神殿梓です」

「そうか。俺は加藤正史だ」
かとうまさふみ

正史も自己紹介し、

「……別に隠す必要はない。俺だってもう引退してるが、訓練員だったんだ。知り合いの現役軍人からお前らのことは耳にしてる。俺は名前を訊いたんだ」

「あー、そうすか」

啓太が言う。

「……でも、それだったら何で反逆者である俺らの手助けなんかしてくれんすか？」

「それがお前らの正しいと思った道なんだろう？」

正史が問い返す。

「ええ、まあ」

「ならいい」

正史は事も無げに言う。

「ここにすることも、そのうちばれるだろうし、時間ないだろ。すぐに始められるように準備しとけ」

「はい！」

信治が返事する。

「……ああ、ただ、もう1人来てから訓練始める」

「え、もう1人？」

「律儀に前もって電話入れてきたやつがな」

正史は答えた。

その「律儀な」人物がやってきたのは信治たちが正史の家に来た、その1時間ほど後のことだった。

「……え!？」

正史と共に玄関から出てきた信治は、その人物を見て驚いた。相手の方も啞然とした様子で信治を見ている。

「し……信治、何でここに……!？」

相手……奏はやつとのことと言った。

「奏こそ……」

信治もやつとのことで返す。

「……会ってしまった以上は」

奏が刀に手を持っていく。

しかしその手を正史が止めた。

「何で止めるんですか?!? 信治は……」

「知ってる。だがここにいる間は、信治もお前も同じ訓練生だ。余計なことはするな」

正史は奏を睨む。奏は納得がいかない様子だったが、

「……分かりました」

と答えた。

「よし、すぐに訓練を始めるぞ」

正史は5人に言った。

2 課題

6人は正史の自宅から数百メートルのところにある、彼の道場に入った。

「ここにいる間はこれを使え。真剣は俺が預かる」

そう言つて、正史は5人に木刀を渡した。

「まずはお前らの力を見る。1対1で打ち合ってくれ。……奏と信治、お前からからだ」

2人は頷いて、部屋の真ん中に進み出る。

「ここで打ち合つ、久しぶりだね」

奏はいつもの構えをとる。

「そうだね」

信治も刀を自分の正面に構える。

「よし、始め！」

奏の刀が蝶のように舞い、信治を襲つ。

「！」

信治は右に左に刀を逸らす、反撃に出ることができない。

「す……！」

梓は呆氣にとられている。

「信治は戦闘スタイルを見直す必要があるそうだが……、刀の扱いに関して奏に教えることはもうないな」

正史も言う。

「あいつは……『心』の方が」

「心？」

梓が聞き返す。と、その時、奏の刀が信治の左肩に当たった。

「そこまで！」

正史が叫んだ。

「次、瑞紀と啓太！」

「えっと、私は……？」

梓が控えめに訊く。

「待ってろ」

正史はそう言ってから、

「始め！」

と再び声をあげた。

「手加減しねえからな？」

啓太は瑞紀の出方を窺っている。

「いないよ、別に」

瑞紀も両手に短い木刀を握って啓太の様子を窺っている。

「来ないのか？」

啓太が挑発するが、瑞紀は乗らない。

「来ねえなら、こっちから行くぞっ！」

啓太が先に踏み込み、瑞紀に向かって刀を振り下ろす。瑞紀は冷静にそれを受け流した。しかし啓太はすぐにまた、攻撃を仕掛ける。

「うわ、一方的だ……」

梓が呟く。啓太の容赦ない連続攻撃を、瑞紀は受け流すばかりである。

「そう見えるか？」

「え？」

正史の言葉に、梓は怪訝な顔をする。

「だって……」

「覚えとけ。ただガンガン斬り込むだけが攻めじゃない」

「でも……奏だってあんなに攻めてたし……」

梓は納得いかない様子で反論する。

「奏は『攻めることのリスク』を分かっている。だから勝てる。だが、啓太はそれを分かっている。そういうやつは……」

と、ここで瑞紀が隙をみて啓太に斬り返した。

「うッ……………」

啓太はなんとか受け止める。しかし瑞紀は2本の短刀で素早く打ち込み、啓太の反撃を許さない。

「……………このッ……………」

啓太は強引に刀を振ってその連打を止めると、再び斬り込んだ。が、中途半端な斬撃を瑞紀がかわすのは容易いことだった。

彼の斬撃をかわした瑞紀は、がら空きになった啓太の体に一撃を入れた。

「そこまで！」

正史が叫んだ。

「……………瑞紀はもう少しパワーが欲しいところだな……………」

そう呟いたあとに、彼は梓の方を向く。

「よし、お前の番だ」

「はいッ」

「相手は俺がする」

「えっ！？」

梓は少し戸惑っている。

「早くしろ」

「え、でも……………」

「何だ？剣術の訓練だから、魔法はなしだぞ」

正史が焦れたように言う。

「お年寄りに刀振るのは……………」

「頭がち割ってやろうか？」

「梓、やってみ」

信治が言う。

「勝てるもんなら」

その数分後、梓は床に転がされていた。

「何、何この人ッ!？」

「師だつて言つたじゃん」

信治が言う。

「お前は基礎から叩き込んでやる」
正史が梓に言った。

「……さあ、個別に訓練するぞ」

3 親友

奏は道場の裏にある広い訓練場で、訓練用の人形と向かい合って立っていた。

お前が信治に対して刀を振るえなくなっているのは、お前が揺らいでいるからだ
正史に言われたことを思い出す。

お前は、自分の信じる自分を見失っている
奏は木刀を強く握り、目の前の「敵」を睨む。やや前傾の姿勢をとって「抜刀」の構えをつくる。
今、自分は何がしたいのか、考えろ。お前にしか、お前は見つけられない

叩き付けた刀は、固定された人形を大きく震わせた。

「……見つけなきゃ……」

（私の中にいる、本当の私を……）

瑞紀もまた、「敵」に木刀を叩き付けていた。しかしそれは、いつものような素速い連打ではない。

お前は、確かに速い。……だが、その1打1打に力が入っていない
それが正史の評価だった。そこで瑞紀は、1打の力を上げる訓練を

することになった。

今は、速さは気にするな。それよりも刀の振り方に気をつかえ

瑞紀はその通りに短刀を振ってみる。しかし、
「うーん……」

自分のフォームをどう直せばよくなるのかが見えずにいた。

「もう1回」

不意に聞こえた声に驚いて振り返ると、正史が瑞紀の様子を見に来ていた。

「もう1回」

「あつ、はいっ！」

瑞紀は短刀を大きく振って人形に叩き付けた。感覚は、変わらない。
「……手首だな」

少しの間をあけて、正史が言った。

「えっ？」

「大きく動かすのは腕じゃない。手首だ」

正史は説明する。

「短刀は、相手との間合いを詰めないと使えないからな。短刀使うならボクシングのジャブみたいにコンパクトに打たなきゃダメだ」
「はいっ」

瑞紀は彼の指示に従って、もう1度短刀を振る。

「違う、ぶつける瞬間に力を込める」

「はい！」

さらにもう1振り。

「もっと手首のスナップきかせろ」

「は、はい！」

3度目の感覚は、それまでと違った。強い衝撃が自分にも少し返ってくるのが分かった。

「……！」

「うん、よくなった。それを自然に出せるように練習しろ」

そう言うと、正史は去っていった。

「はいっ！ありがとうございます！」

彼の背に向かって返事した後、瑞紀は訓練に戻った。今の感覚を忘れないように何度も打ち込む。

（足手まといにはなりたくないし、もう何も出来ずに見てるだけなんて嫌……！）

瑞紀の心には、梓を連れていかれた日のことが引っかかっている。

近所に住んでいて、たまたま知り合った啓太と気が合い、ある程度親しくなった頃に、彼は瑞紀に梓を紹介してくれた。初めは「魔族」だということで警戒していた瑞紀だったが、梓の明るく裏表のない性格にいつの間にか引き込まれていた。瑞紀にとって梓は、2人目の親友となった。

しかし、彼女はある時やって来た魔族掃討軍に連れていかれた。当時、何の力も持っていなかった瑞紀には、何もできることはなかった。ただ、梓が連れていかれるのを見ていることしかできなかったのだ。

（……だから、）

瑞紀は決意を新たにする。

（もう絶対に梓を連れていかせたりしない……！）

4 恋

奏は道場の中で正座をして、瞑想にふけていた。

（私は、どうして掃討軍に入ろうと思った……？）

自分に問いかける。

（魔族を倒すためだ）

答えは、すぐに見つかった。

（魔族を倒して、この国を平和にしたいって思ったからだ）

彼女の思考は、さらに深いところへと進んでいく。

（それで私は軍に入って……、だけど、信治は軍を裏切った……！）

奏は膝の上に置かれた手を強く握りしめる。

（それが許せなくて……）

しかし彼女の思考は、そこで躓いた。

（でも、だったら何で斬れないの……？ どうして刀が止まるの……
？ どうして信治の気迫にあっさり飲まれちゃうの……？）

「奏、来てるな」

正史が現れた。奏はこの日、彼に道場に呼び出されていたのだ。

「はい。……何をするんですか？」

「悪いがちよつと、こいつと手合わせしてやってくれ」

正史の後に続いて現れたのは、啓太だった。

「啓太。お前、奏と戦って、もしお前が勝ったら、お前の戦い方が

正しいと認めよう」

「分かりました。勝ってみせますよ」

正史は溜息をつく。

素直に彼の指示に従った瑞紀と違って、啓太は頑なに自分の戦い方を変えようとしなかったのだ。自分のやり方で強くなるんだと言って、正史に従おうとしない。正史を信用できない様子だった。

しかし、正史が見たところ、啓太の戦い方は、勇敢と言えば聞こえはいいが、有り体に言えば蛮勇であつた。戦いにおける「流れ」を読まず、どんな状況でも強引に攻めようとする。こんなことを続けていれば、いずれ命を落とすことになるだろう。しかし啓太には、そんな無茶苦茶な戦闘スタイルを変える気がないらしい。

そこで正史が考えたのが、奏との手合わせだったというわけだ。

「……2人とも、準備はいいな？」

正史が奏たちに言う。

「はい」

「いいつすよ」

木刀を構えた2人が答える。

「よし。始め！」

その瞬間、奏の姿が消えた。

「……！」

啓太が気づいた時には、彼女は既にその高速の斬撃を、彼に向かって放っていた。

「いッ……！」

間一髪のところまで受け止めるが、その強力な一撃に啓太は弾き飛ばされる。

奏は攻撃の手を緩めなかった。すぐにまた踏み込んで刀を振る。その素速い斬撃を啓太は防ぐので精一杯である。

「くそッ……な、めんなアッ！」

啓太は強引に刀を振って奏の刀を弾く。奏は少し後退する。そこに啓太が一撃を入れようと斬り込んだ、が。

「！？」

啓太が横に払った刀を奏は跳んでかわした。空振りした彼の体はがら空きになっている。奏は躊躇することなく彼の肩に刀を振り下ろした。

「……そこまで」

正史が、決着がついたことを告げた。

「奏、ありがとう。もういいぞ」

「はい。失礼します」

奏は道場を出ていった。

「……これで分かっただろう」

正史は座り込んでそっぽを向いている啓太に言った。

「……」

「そんな戦い方してたら、いづれ死ぬぞ」

「……強く、なれるんすか？」

「何？」

「俺は戦い方を変えるつもりはありませんでしたよ。だって、前に教わった戦い方は全く通用しなかったから。それで、俺はこれくらい無茶しなきゃ戦っていけないって思ったから」

「それは違う。お前は……」

「だからッ！」

啓太は正史の方を向いて叫んだ。

「……だから、あんたに従って訓練すれば、今よりも強くなれるんすか？自分以外の誰かも守れるくらいに、強くなれるんすか？」

「なれる」

正史は断言した。

「万一だめだったら俺を殺せ」

「……俺は、どうすれば？」

「瑞紀とでも手合わせして戦いの『流れ』を読む練習をしろ。お前

は力がある。無理に攻めずとも、相手の攻撃を逸らして、隙ができた時に踏み込むように十分に戦える」

「『攻め時』を見極める練習っすね。分かりました」

啓太は早速、瑞紀を捜しに道場を出た。

偶然に出会った若い女の目には「魔族の証」があった。だが、啓太がその時に警戒心を抱かなかったのは、彼女が、梓が初対面の彼に向かって笑いかけたからだろう。まるで旧友に会ったかのような親しみのあるその笑顔に、啓太は引き込まれた。もっとはっきり言ってしまえば、一目惚れしたのだ。

気持ちを伝えることができたのは、その後知り合った瑞紀のサポートがあったからだ。彼女がいなければ、啓太が告白に踏み切ることはなかっただろう。ともあれ、啓太は気持ちを伝え、梓はそれに応えた。しかし、そのすぐ後に2人は引き離されることになった。

啓太は訓練場に瑞紀の姿を見つけた。

「瑞紀、俺と手合わせしてくれ！『戦いの流れ』ってやつが見えるようにならなきゃいけないんだ」

「？……よく分かんないけど、普通に戦えばいいんだよね？いいよ」「本気で頼む」

啓太は刀を強く握りしめた。

（梓ともう絶対に離れることのないように、俺はもっと強くならなくちゃいけないんだ……！）

5 守られる気持ち

（信治が斬れないのは、信治がやっぱり、私の大切な友人だから……）

「自分探し」を続ける奏は、正史や信治たちと食卓についていた。その日も厳しい訓練をして疲れ切った彼らにとっては、心休まる夕食の時間である。

（ずっと一緒にいたから……。だから、信治が裏切ったことにも、何かわけがあるはずだって……）

口に含んだみそ汁は身体を温めてくれたが、彼女の心は冷えたままだった。

（もしかしたら信治の方が正しいんじゃないかって思ってる私もいるんだ……）

奏は信治に目を向ける。彼は啓太たちと楽しそうに話をしている。その笑顔は彼女が知っているそれと変わらない。

（どうして「そっち」にいるの……？）

……と、不意に信治が奏の方を向き、奏と目があつた。奏は慌てて目を逸らす。今、信治と話すことはできない。今話そうとすれば、このこんがらがった気持ちが溢れだしてしまう。そんな気がしたのだ。実際、彼と目があつたというだけで、彼女は自分の中から何かがこみ上げてくるのを感じていた。しかしそれはなんとか押さえ込む。

代わりに自分の足が椅子の下で縮こまっていることには、後で気づいた。

「……ところで、梓、」

啓太が話しかける。

「ん？」

「体鍛えることで魔力が強くなったりとかしないの？筋肉みたいにさ」

うーん、と梓は少し唸っていたが、

「……ダメだと思う。魔法物質は生まれた時に持っている分だけだつて教えられたもん。増えたなんて話聞いたことないし……」
と答える。

「鍛えてどうにかなるんなら、みんな上級魔族になつてるだろうしね」

瑞紀の言葉に確証を得た梓は、そうだよ、と今度は自信たっぷりに言う。

「じゃあ、他の魔法も使えるようになるのか」

「いや、そんなのますます無理」

梓は首を横にふる。

「あ、そういえば魔族ってみんなそれぞれ1つの魔法しか使わないよね？何で？」

信治が訊く。

「それは『クセ』がついちやうからだよー」

梓が答える。

「『クセ』？」

「うん。魔族は生まれてから魔法支配能力が形成されていくの。その間に魔法の型も決まってくる。その基準になるのはその魔族の本質だとか言うけど……、まあ、赤ちゃんのうちに目にしたものとか、そついうのが関係してくるんじゃないかなあ」

「なるほど、納得。お前炎みたいに騒がしいもんな」

啓太が茶々を入れる。

「むッ……！こうしてやるこうしてやるっ」

梓は啓太の前に鳥の唐揚げを掲げる。

「一応言つとくと、揚げると焼くのは違うからね？」

そこで瑞紀が指摘する。

「……ふんっ」

それを聞いて、梓は顔を真っ赤にしながら唐揚げを頬張ると、ふくれっ面でそっぽを向いた。彼女はどうかしら料理をしたことがないらしい。

「えーと……、とにかく、そうして決まっちゃったらもうその魔法しか使えないんだね？」

信治が取り成すようにそう訊く。

「そういうことですー」

梓はそっぽを向いたまま、投げやりな口調で答えた。

「悪かったよ、梓」

啓太が謝るが、梓はふくれっ面のままだ。

「……っていうか、悪口言つたつもりはなかったんだけど」

「そーですかそーですか」

「だってお前がそーいう、めちゃくちゃ明るいキャラだったから好きになったんだし」

「はひッ!？」

梓はますます顔を赤く染める。もはや茹でダコである。

「いや、俺真面目に言っただぞ？」

「ん……、ま、まあ、分かった。許してあげる」

梓は満更でもない様子でそう言った。機嫌は直ったようだ。

「えーと、魔法のこと、ちょっと補足すると……、つまりね、物心つく前に能力が完成しちゃって、発動の練習みたいなものも無意識のうちに繰り返してるから、その後になんかこうしようたって、」

クセ』がついちゃっててどうにもなんないの。みんな、歩き方って知ってるけど、羽を動かす感覚なんて分かる？」

「うーん、そりゃあ確かに無理だなあ……」

啓太が言う。

「魔法の使い方なんて、感覚の問題だからさ、教えてもらっていろいろも無理。どうやったら歩けるかなんて説明のしようないじゃん」「それもそつだな」

「余計なことは気にしないでいい。お前にとっては、剣を扱えるようになるだけでかなりのメリットがあるんだ」

正史が言った。

「あ、はい！」

梓は素直に返事した。

次の日。梓は正史の刀を受け流す訓練をしていた。

「そつだ。正面から受けるな」

「……あの、師」

「なんだ」

正史は刀を止める。

「そろそろ攻める方も教えてもらえませんか？」

「……お前は守りを極めた方がいい」

「え？何で？」

「お前には魔法があるだろうが。攻める方はそれで十分だ」

正史は呆れた様子で言う。

「問題は守り。魔族は魔法に頼りすぎていた。だから人工魔法が完成した今、その魔法が破られて接近されるとどうしようもなくなる。……だが、剣が使えれば、もう1度間合いをとることができる」

「そうか……」

「接近戦になったら誰かに守ってもらうっていうのは、お前も嫌だろ？」

「！……はいっ！私、守りを極めます！」

思えば、守られてばかりだった。魔力が弱いということもあって、両親はいつでも梓のことを庇ってくれた。だから、いつの間にかそれが当たり前のことになっていたのだろう。あの日……掃討軍に捕まった時、梓は、どうして誰も助けられないのかと、すべてを恨んだ。だが、それでも、啓太たちは梓を救ってくれた。梓自身が投げ出した彼女の命を守ってくれた。その後も、ずっと梓は彼らの後ろ。命をかけて戦う彼らの後ろで、自分だけ安全な場所で戦っていた。

だが、守られてばかりなのはもう嫌だと、梓は思うようになっていた。

（私も、）

梓は思う。

（私も、大切な人たちを守れるようになるんだ……！）

「よろしく願います！」

正史に言って、刀を構える。

（そのためにも、まずは自分自身を自分で守れるようにならなきゃ

……！）

6 二律背反

「……信治、焦るな」

正史が声をかける。

「はい。すみません」

信治は刀を構え直す。

「お前の強さは冷静な守りにあるんだ。焦って攻めにいくようじゃ、勝てないぞ」

「はい」

「一旦休んだ方がいいんじゃない？」

信治の相手をしている瑞紀が言う。

「いや、もう少し」

信治は首を横に振る。

「……分かった。じゃあ、行くよ？」

「うん」

修が信治たちの前に現れた時、信治の中で最初に沸き起こった感情は、「喜び」だった。掃討軍によって家族と引き離されてしまった由実香の前に、ようやく、彼女との繋がりを持つ者が現れたのだ。喜ばしいことだと、信治は思った。

しかしその次の瞬間、彼は自分の中にもう1つの感情があることに気づいた。気づいてしまった。

（どうしてこんな急に、由実香が連れていかれなきゃならないんだ……！？）

それはあまりにも傲慢な、あまりにも自分勝手な「怒り」だった。つまり、由実香がいつまでも自分のそばにるように思っていたのである。たかだか数週間、一緒にいたというだけで。

信治は由実香が去っていった後、いや、奏の涙を見た時であろうか……。冷静になった信治は、自分の中にある、その2つの感情が縋り交ぜになっていることを自覚した。

そして、信治は思った。このまま、有耶無耶にしてはいけない。傲慢な自分と決着をつけなければ、と。

（そのためには、もう1度由実香に会いに行かないと。修とも戦うことになるはず……）

そして、彼と戦えるだけの力を得るために信治は、正史の元で修行することを決めたのだ。

それ自身、我が儘なことだということは、信治も分かっている。だが、由実香を奪い返そうとまでは考えていないのだ。それくらいのことは許されていいだろう。

信治は、由実香を解放した。しかし、由実香もまた、信治を解放したのだ。軍に、国に操られていた彼を正気に戻したのは、間違いなく彼女だった。だから、そんな彼女の幸せを、信治も喜びたいと思った。

信治は瑞紀の素速い斬撃を丁寧を受け流す。そして、

（……今！）

彼女のわずかに乱れた左の斬撃をはね除けると、右の短刀が来る前に大きく踏み込んで、瑞紀の右肩に一撃を入れた。

（強くなるんだ……！弱い自分に勝つために）

信治の思いは、日に日に強くなっている。

（私の信じる私は、どちら……？）

奏は木刀を素振りしている。そうしていなければ、自分の中に何か嫌な気持ち溜まって、苦しくなるからだ。

（軍人としての私……？それとも、信治の友人としての私……？）
奏は、迷っていた。

両方を選ぶことはできない。軍人ならば、信治を斬らねばなるまい。友人ならば、今度は逆に軍と戦うことになるだろう。

かと言って、選ばないわけにはいかない。それは、今現在の彼女であり、今の自分のままではダメだということは、彼女自身が一番よく分かっている。どちらかを選んで、彼女は彼女を確定しなければならぬ。

奏はもう1度、これまで考えてきたことを振り返る。

どうして掃討軍に入ろうと思ったのか。どうして信治が斬れないのか。「そっち」に信治がいることに対する苦しさ。

……そして、

（……そうか。そうだよ……！）
1つの答えに至った。

奏は木刀を構え直し、抜刀する。その一閃はもう、ブレなかった。

7 師の言葉

瑞紀は素速く短刀を振る。その斬撃は、今までよりも力強かった。「そうだ。あとは今までの動きも混ぜて、攻撃に波を作るようにするといい」

正史がアドバイスする。

「はい。ありがとうございます」

律儀に頭を下げる瑞紀に、ああ、と返事を返すと、正史は訓練場を道場に向かって歩いていく。

瑞紀の近くで素振りをしているのは啓太だった。

「おい、啓太」

「はい？」

「俺の相手してみろ」

「ああ、分かりました」

啓太が木刀を構えると同時に、正史は刀を振り下ろした。

「！」

啓太はそれを受け止める。正史は手を緩めることなく、刀を振り回す。彼はその1つ1つを丁寧を受け流し、正史の刀が大きく逸れたタイミングをねらって踏み込んだ。そして正史が再び攻撃に転じる前にその首筋を軽く打った。

「俺の勝ち……で、いいっすよね？」

「ああ、そうだな」

正史は頷く。

「……そうだ、それでいい。どんな状況でも、熱くなって飛び出したりするなよ」

「分かってますよ」

啓太は刀で自分の肩を軽く叩きながら返事した。そんな啓太の態度を軽く諷めてから、正史は道場に向かう。

訓練場の真ん中で慣れない刀を振っているのは梓だった。

「あー、師」

「梓、」

「何ですか？」

……と、正史は首を傾げている梓に向かっていきなり刀を振り下ろした。

「なっ……！？」

梓は素速く反応してそれを受け止めた。

「何するんですかっ！？」

「……うん、ちゃんと反応できてるな」

「はい？」

「守りがしっかりしていれば、負けることはない。それを忘れるなよ」

「はあ……」

あっけにとられている梓をよそに、正史はまた歩きだす。

道場の側で丁寧な動きを確認しているのは信治だった。

「……もうお前の相手は、俺じゃ無理だな」

「え？」

「焦るなよ。お前がこれからどんな敵と戦うことになるかは分からないが、どんな敵であろうと焦って行動起こすところくなことになるからな」

「はい」

「お前の強さは冷静な守りにある。守りながら確実に勝てる方法を考えて、それから行動するんだ。それを心に刻んでおけ」

「はい！」

信治の横を抜け、正史は道場に入る。

道場では、奏が正座をして瞑想していた。

「奏、」

「はい、何でしょう？」

奏は顔を上げて正史を見る。その目を見て、正史は分かった。

「……見つかったみたいだな」

「はい。師のおかげです」

「自分をすっかり持っている奴は強い。俺からお前に言えるのは、もうそれくらいだな」

正史はそう言くと、そのまま道場を抜けて自宅へ向かった。

その夜。夕食時に、正史は突然宣言した。

「訓練は今日で終わりだ」

「ええっ!？」

梓が驚いて声をあげる。

「ちよつと待って、何でそんな急に」

「もう、俺が教えられるだけのことは教えた。後はそれぞれ、自分で努力するだけだ」

「時間的にも、限界でしょうしね」

信治も言う。

「え？信治知ってたの？」

梓が問う。

「知ってたよ。師がいつも急に言っつてことはね」

「あ、そっち？」

瑞紀がつっこむ。

「まあ、そろそろ軍の人間も来るだろうし、師が言わなかったら俺から言うつもりだったよ」

信治はそう続ける。

「なんだ……それだったら早めに教えてくれれば良かったのに」
梓は少し膨れて言う。

「ああ、悪い」

「……とにかく、そろそろここを出た方がいい」

正史がまとめるように言った。

「そうっすね」

啓太も頷く。

「……どうする、リーダー？夕食食ったらすぐ出るか？」

「……いや、とりあえず今日は休んで、明日の朝出よう」

「了解」

「……奏はどうする」

正史が訊いた。

「私も明日出ます」

奏は短く答えた。

「そうか」

こうして唐突にやってきた訓練最後の夜は、静かに更けていった……。

8 答え

翌日の朝。6人は道場にいた。

「ああ、もう出発かあ……」

梓が呟く。

「あつという間だったね」

瑞紀も言う。

「お前ら、感慨に浸ってるのはいいが、これ忘れるなよ」

正史が道場の倉庫から、信治たちの武器を出してきて言った。

「お、やっぱりこっちの方がしっくりくるな」

啓太が言う。

「……えつと、」

梓が困った様子で正史を見る。

「大丈夫だ。これ使え」

正史は手に持っていた剣を梓に差し出す。

「え、それ……」

「俺のだ」

「いや、だから、それじゃあ師困るでしょう……？」

「もう真剣はいらない」

正史はそう言ったが、それでも梓が困惑した表情を見せるので、

「……それに、俺は知り合いの軍人通じてまた手に入るしな」と付け加えた。

「そう、ですか。……それなら、頂きます」

梓はようやく、彼の剣を受け取る。

「それじゃあ、俺らは行きます」

信治が言った。

「ああ」

正史は素っ気なく返事する。信治たちはそんな彼に一礼してから、道場を出ていく。

「信治、」

しかし、そこで奏に呼び止められた。

「……奏」

「私ね、ここにいる間、ずっと考えてたの」

奏は淡々と語る。

「私はどうするべきなのかなって」

「……」

信治は黙って、彼女の次の言葉を待っている。

「それでね、分かったの」

奏はそこで一呼吸おいてから、刀をゆっくりと抜いた。信治も１歩退いて、剣に手をやる。

「私は、人間の幸せを守るために戦う。わたしたちそして、北原信治は、それを揺るがす存在なんだよ……！」

奏は刀を信治に向ける。その刀は、今までのそれとは比べものにならないほど、ぎらついているように彼には見えた。

「信治、」

そして奏の目にもまた、これまでにない迫力があつた。

「決着をつけよう」

信治は一瞬、落胆した様子を見せたが、すぐに奏を正面から見て

「分かった」

と答えた。

２人は、軍に入隊する前からそうしていたように、道場の真ん中

で向かい合う。

「ねえ、やめようよ……こんなの」

梓が悲痛な声をあげる。

「だって、2人は幼なじみなんですよ……？　ずっと仲良くしてたんでしょ……？　なのに、こんな……」

「奏が選んだことだ」

正史は事も無げに言う。

「そして信治が選んだことでもある」

「でも、『決着』ってつまり……」

「見てもらえないなら、外出てる」

正史は冷たく言い放った。梓は、今にも泣き出しそうになりながらも、その場に残って、対峙する2人を見つめる。

「2人とも、準備はいいな？」

「はい」

2人の声が重なる。

「よし。……始め！」

その瞬間、奏の抜刀が信治の剣に叩きつけられる。

「！」

奏の刀は、今までにない速さで舞う。信治も素速く対応するが、彼女の速さには及ばない。早くも、奏が振り下ろした刀が信治の左肩に浅く入った。

「ぐッ……！」

信治は大きく剣を振って刀を弾き、間合いをとろうとする。しかし、奏はすぐに踏み込み、それをさせない。信治は致命傷こそ避けているものの、次々に斬撃を受けてしまう。

「うッ……、あアッ！」

信治は、今度は逆に大きく踏み込んで、奏にぶつかっていく。

「ッ！」

金属が擦れ合い、鈍い音を響かせる。技術的には信治よりも上の奏だが、やはり単純な力では彼に敵わない。押し合いでは分が悪いと判断した奏は信治の剣を払い、一旦距離をおいた。

「……俺は……、人間の幸せを、潰すつもりはないっ……！」

信治は荒い呼吸をしながら、訴える。彼の服は既にあちこちが裂け、血に染まっている。

「俺は人間も魔族も、幸せになれる国を」

「幻想にすぎないよ、それは」

奏は冷たい視線を、信治に向ける。

「幻想なもんか……」

「違うんだよ、信治」

奏は、まるで子供に言い聞かせるような口調で話す。もっとも、その言葉には、子供に対する時のような優しさや温かさといったものは微塵も感じられない。

「信治は、ただ人間の平和を脅かしてるだけ。現状を悪化させてるだけなんだよ」

「違う……俺はっ！」

信治は奏に向かって突進していく。しかし次の瞬間、彼の横を奏が風のように素速く走り抜けた。反応の遅れた信治は、その高速の刃を右の腰辺りに受けてしまった。

「いッ……！」

「分かってる……、分かってるよ、信治」

奏は、片膝をついて傷に手を当てる信治を振り返る。彼の足下には、いつそ美しいと思えるほどに鮮やかな赤が広がっている。

「言ってもダメだってことは、分かってる。だから私が、……」

奏はそこで口を噤む。それ以上は、口に出したくなかった。

「……覚悟を決めて。信治」
奏は友人の血が滴る刀を軽く振ると、再び構える。

「ねえ、ちよっと、ダメだよ……！助けないと、ねえ……！」
梓は啓太に、瑞紀に、呼びかける。しかし啓太は黙って首を振り、
瑞紀も苦しい表情を浮かべながら、ただ立ち尽くしているだけだ。
「やっぱりダメっ、私……」

だが、動こうとした梓の首筋に、木刀が当てられる。正史だった。

「もう1度言う。見てもらえないのなら、出ていけ」

正史は梓を睨みつけ、先ほどよりも低い声で言った。

「……ッ！」

梓は服を握りしめ、身を強張らせる。しかし顔はあげて、戦う2人からは目を離さない。

（逃げるな、私……！）

その理由が、特別あるわけではなかったが、梓はそうしなければならぬような気がして、その場に留まった。

奏が再び放った斬撃をなんとか受け止めた信治は、しかし床に転がされてしまった。

（いや、違う。焦るな……）

彼は自分に言い聞かせながら、立ち上がる。

「ッ！……奏、」

奏は、答えない。

「……ごめん」

信治は静かに言った。

「……何で謝るの……」

奏が口を開いた。

「何で……」

「ごめん」

信治はもう1度言っ。

「だから、何で謝るのっ!？」

奏は叫んだ。

「軍に戻る気ないなら、謝らないでよッ！」

奏は再び攻撃する。信治は奏の振り下ろした刀を逸らさずに受け止める。刀が悲鳴をあげた。奏は信治の剣を弾いて半歩退き、今度は刀を右から突き出す。

「……なッ!？」

信治は、左の脇腹に入った刀を左手で握って押さえ込んだ。そして次の瞬間、彼の剣を奏の右腕に突き刺す。

「いッ！」

「おおオッ！」

そのまま道場の壁に奏ごと突っ込んだ。剣は彼女の腕を貫通し、壁に深く刺さった。

「!……信治っ!？」

奏の手を離れた刀が床に落ちて、鈍い音をあげる。

「奏の『決着』は、俺を殺すことしかないけど、」

信治は、その刀を拾い上げる。

「俺の『決着』は、奏から逃げることだよ」

「そんなのっ、認めな……、ッ！」

奏は動こうとするが、壁に深く突き刺さった剣はビクともしない。ただ、余計に血が流れるばかりである。

「行きます、師。鍛えて下さって、ありがとうございました」

信治はそう言っ、ふらつきながら道場を出ていく。

「信治っ……待っ……、まだッ……！」

奏が悲痛に叫ぶ。信治は立ち止まった。

「……ごめん」

彼は振り返らずにもう1度言っ、再び歩き出す。

「……だから、謝らないでよ……！」

奏は掠れた声で言う。

「信治、もういいの……？」

瑞紀が問う。梓は既に、涙をこぼしている。

「うん。……行こう」

啓太が信治に肩を貸す。4人は正史にもう1度頭を下げ、道場を出ていった。

「……手、貸そうか？」

正史が静かに訊く。奏は首を振る。

「……すいません、1人にしてください……」

「……分かった」

正史はそれ以上何も言わずに、道場を出ていった。

「……ッ！」

奏は左手で剣を掴み、引く。

「ぐッ……！」

彼女の血液が剣を伝う。

「ううッ……！」

ようやく、剣が抜けた。腕から溢れ出る血は、今度は直接、彼女の足下に流れ落ちる。

「ハア……、ハア……！」

その場で彼女は膝をつき、座り込んだ。力が抜けると同時に、涙がこぼれた。

（何で……、何でっ……！）

奏は嗚咽が漏れるのを堪えながら、涙を拭う。しかし涙はあとからあとから溢れてきて止まらない。

（何で私も守るのっ……！！）

足下に広がる血だまりに、涙が落ちて混じり合う。

「馬鹿っ……！！」

堪えきれなくなった嗚咽と共に口をついて出た言葉は、信治に対する怒りと、自分に対する情けなさだった。

1 焦燥感

信治たちは、オルガより北の地、アクネの北西に位置する小さな町エトニアの診療所にいた。

「……まだ出ていくには早すぎると思いますが？」

この診療所の医師は、ベッドから起き上がって窓の外を見る信治に言う。

「まだ何も言つてませんけど……」

信治は苦笑しながら返す。

「『まだ』でしょう？」

「……」

信治はあちらこちらに包帯の巻かれた自分の身体を見る。

「自覚はしてますよ」

「してたら、出ていこうとは思いませんよ」

「いや、ホントに分かってます。分かってますけど……、もう1週間ですよ？俺、あんまり時間ないんで」

「……何か訳がありそうですね」

「まあ……。そうだ、あなただって俺みたいな訳アリの患者をいつまでも置いときたいはずだ」

「……訳アリ、か。まあ、そうですね。刀持ったボロボロの人ってなると、軍人だろうけど、軍服着ないで戦いに出ていくっていうのはおかしいし、軍にも医療班がいるだろうにわざわざこんな田舎の小さな診療所に来るなんて……、訳アリだと思わない方がどうかしてる」

医師は顎に手を当てて髭を擦りながら、推理するようにそう話した。年の頃は20代後半か、いっても30代前半といったところだろう。ところどころ撥ねた髪や剃り残した顎髭、そして白衣の下に着ている少々派手なシャツは、彼から「医者らしさ」を幾分か奪ってしまっているが、不思議と不快な印象を信治は受けなかった。

「……そこまで怪しいと思ってるなら、俺を止める理由はないでしょう?」

「……分かりました。どうぞ、行ってください」

信治の真っ直ぐな目を見て、医師は頭を掻きながら投げやりに言った。

「ありがとうございます」

信治は礼を言つて、身支度を始める。

「ただ、誤解してほしくない」

医師が少々機嫌悪そうに言う。

「訳アリであろうが魔族であろうが、私にとっては、『患者』は『患者』だ」

「魔族……あー、」

……と、その時、買い出しに出ていた瑞紀たちが診療所に戻ってきた。

「ただいまーっ」

色眼鏡をかけた梓は、全く目立たないようにしようという気がないらしい。開けっぴろげにした彼女の様子からは、逆に怪しさが感じられなかった。

「……もしかして、気づいてます?」

信治は、少し居心地悪そうな様子で問う。

「ええ、まあ」

医師は事も無げに言う。

「今更、だからどうだってことはありませんが」

「……ハハ」

信治は思わず笑みをこぼす。

（いるんだ……）

祐介は言った。今や国全体が魔族の掃討を支持している、と。信治の中にはその言葉が残っていて、由実香と収容所を出てからも、この国の人間全てが敵であるように思っていた。何も信じられなか

った。

しかし、信治は出会った。魔族である梓と強い絆を持ち、彼女を救うために戦っていた啓太や瑞紀。信治を支持するわけではないにしろ、軍と戦っていく道もあるということを認めてくれた正史。そして、魔族をつれて突然現れた信治を無条件で信じてくれた目の前の医師。

その数は、とても少ないのかもしれない。しかし、ゼロではないのだ。

「名前、訊いてもいいですか？俺は北原信治っていいいます」
診療所を出る時に、信治は医師に言う。

「飯田誠です」
いいだまてと

誠は煙草を吸おうとするような仕草を見せたが、そんな自分に気がついたようでそれを誤魔化すように頭を掻いた。つくづく医者らしくない医者だと信治は苦笑しつつ、

「ありがとうございます」

と礼を言って診療所を後にした。

「いよいよリベンジか？」

啓太が訊く。

「うん。梓、このまま北へ向かえばいいんだよね？」

「そだよ」

梓は自信ありげに答える。

「上級魔族のほとんどは『議会』の側に住んでるもん。そしてその議会はエトニアの北部にあるんだ」

「OK。んじゃ行くぞ」

啓太はアクセルを踏み込む。

「だからっ、やられる前にやるっって言ってんですよっ！」

エトニア北部、上級魔族の集まる議会。そこで修は訴える。

「しかし、そんなこと言ってもな……」

初老の上級魔族が言った。

「このままでは、魔族は人間に滅ぼされます！そうならないためにも、こちらで戦力を集めて敵の本部を叩くべきです！」

修は何度も繰り返す。

「いや、ここは焦らずにもう少し様子を見るべきだろう」

また別の魔族が言う。

「そうだ。……だいたい、入ってきたばかりのくせに出しゃばるな、小僧」

さらに他の魔族が、修を睨む。

「……」

修は、大人しく引き下がるしかなかった。

「くそっ！あんのクソジジイども……！」

部屋に戻って早々、修は悪態をつく。

「あいつら、動く気ねえな。自分たちさえよけりゃ、それでいいと思っただけだ……！」

部屋の窓際に寄りかかって外を見ていた魔族は、そんな彼の様子を少し寂しそうな笑みを浮かべながら見つめる。

「……そんな顔すんなよ」

修に言われて、由実香はいまいちピンとこない、というように小首を傾げる。

「私、そんな変な顔してた……？」

「変なっつーか、何っつーか……、あの人間たちといった方が良かった

のか？」

「それは……」

由実香は、窓の外を見る。

「それは……、分かんない。でもあの時は、こうすることが1番だ
って思ってたの」

「はっきりにねえな……」

修は少し落胆した様子を見せる。

「ごめん。……でもね、はっきり言えることもあるよ」

由実香は修を振り返る。

「修が迎えに来てくれた時、吃驚したけど、すごく嬉しかった」
彼女は少し恥ずかしそうに笑った。

修は苦笑して、由実香から目を逸らす。結局どっちが良いのか。
そこはやっぱりはっきりしない、中途半端な答え。しかし今の彼に
は、それで十分だった。

2 / 思惑

「……えっ、連絡ないの？」

奏は携帯を片手に、部屋を出る。右はまだ痛むので、左手に持っている。

彼女はまだ、正史の家に残っていた。右腕の治療を受けるため、というのは表向きの理由である。心を落ち着かせたかったというのが実際のところだ。

信治がとった手段……、それは奏の覚悟を踏みにじる行為であり、彼女は腹が立った。しかし信治がそのような行動をとった理由は、敵となっても、友人である奏を殺したくはなかったからである。決して彼女の気持ちを傷つけるためではないことくらい、奏も分かっている。だが、だからこそ彼女は怒ることができず、むしろ胸が痛む思いをしていた。

『そうなんです。こちらからかけても出ないですし……』

電話の相手は、現在0309小隊を取り仕切っている美奈である。

「分かった。私からも一応連絡してみるね」

『お願いします』

「それじゃあ、またね。明日明後日くらいにはそっちに戻るよ」

『はい！』

さつきよりも明るい調子の返事。隊長も副隊長も不在という状況の中、不安だったのだろう。ほっとしたような、そんな気持ちが伝わってきた。

「……ごめんね」

『えっ？』

「いや……、それじゃあ、またね」

『はいっ』

奏は通話を切り、リビングに入る。

リビングでは、正史がコーヒーを飲んでいた。

「師、」

奏は呼びかける。

「何だ」

正史は相変わらず無愛想に返事する。

「将太、連絡つかないみたいなんです」

「ああ……、あいつは時々、ひどく不安定になる時があるからな……」

正史は頬杖をつきながら呟く。

「はあ……。あの、とにかく、将太も帰ってないから、小隊これ以上放っておくわけにもいかないの、私帰ります」

奏は、正史の言葉をどうとってよいか分からずに、とりあえず自分の考えを話す。

「そうか。……もう、落ち着いたか？」

正史は心持ち顔を上げて、言った。

「……正直、まだふらふらしてますよ。信治を追いかけたいと思ってる。……でも、あれが1つの決着だったんだって、だから私はもう、『隊長』に戻らなきゃって思えるくらいにはなりました」

奏は部屋の片隅に立てかけてある信治の剣を手にして、強く握った。
「私は人間の幸せを守ります。それだけは、もう絶対に揺らがない」

「人間が、ここに？」

上級魔族の1人が声をあげる。

突然入ってきたこの情報に、議会は再招集されていた。

「数は？」

「3人です」

守衛についていた魔族が答える。

「3人……！？」

「はい。それから、魔族が1人」

「その魔族が、人間をここに導いたというわけか。……しかし、3人とは……」

その議員は、呆れたように呟く。

「何が目的だ……？」

議会がざわめく。

「多分、俺に用があるんだと思います」
修が言った。

「何？」

議員の魔族は、怪訝そうな様子を見せる。

「その人間たちは、俺に用があつて来たのだと思われます。したがって、議会や、他の魔族に対して何かしてくるということはないと思います」

修は努めて、静かな口調で話す。

「なぜ分かる」

「入ってきた情報が正しければ、俺は1度、その人間たちと戦っています。そのリベンジといったところでしょう」

「リベンジ！？……まったく、お前は どうしてまた、そんな火種を作ってくるんだ……」

別の魔族が溜息混じりに言う。

「その人間たちが背後に軍を控えさせていたらどうする……」

「いえ。その心配はないかと」

修は怒りを押さえ込みながら、そう返す。

「なぜだ」

「彼らは掃討軍を裏切った……言ってみれば人間のはぐれ者です。」

軍がついているはずがない」

「……だが、お前の言うことを100%信じることはできん」

「まずは俺を行かせてください。俺が彼らに目的を直接聞きましよう。俺に用があるのならば、あなた方はこの件に関して一切口出ししないでいただきたい。……しかし、もしも彼らの目的が別の所にあつたならば、その後のことに関して、俺は一切口出ししません」

修は「一切」を強調して言う。

「あなた方にとっても悪くない話であるはずだ。たとえ彼らの後ろに軍が控えていたとしても、俺は捨てゴマだ。時間稼ぎのために使えばいい」

「ふうむ……、どう思う」

議長が誰にともなく尋ねる。周りの魔族たちはしばらくざわついていたが、反論するものは出なかった。

「……よし、分かった。鎔之宮修。お前の案を採用しよう」

「ありがとうございます」

修は半分棒読みの礼を言うと、議会を出ていった。

「……向こうには、連絡ついたのか？」

議会が解散され、部屋に戻った中年の男は、留守を預かっていた魔族に尋ねる。

「ええ。喜んでいましたよ」

「だろうな。やつはアレをそうとう欲しがっていたからな。……ところで、向こうの状況はどうなってる」

男は椅子に深く腰掛ける。

「はい、向こう側は既に声をかけ始めているそうです」

「そうか。……まあ、向こうは組織が大分ばらけてるからな。こつちの場合、議会の連中を言いくるめるのは難しくないし、急ぐこともないだろう。問題はアレを奪うタイミングだったが……、それも今日解決したしな」

男は上機嫌で椅子にもたれ掛かる。

「今夜は、祝い酒だな……」

3 リベンジ

「……ここが、魔族の世界の中心……」

信治は呟く。目の前には緑の濃い山があり、辺りには霧が立ちこめている。

「ホントにこんな所にあるのかよ？」

啓太は怪訝そうにその山を見つめる。

「あるよう」

梓は少し膨れて言う。

「魔族はみんな1度は来てるのっ。上級魔族の適性を調べるためにさ」

「ふうん」

「よし、行こう」

信治は山に向かって歩き出す。しかしここで、梓が待ったをかけた。

「あのさ、今更言うのもなんだけど……、ここから先は、かなり危ないと思うよ？」

「それは始めっから分かったことだろ」

啓太は事も無げに言う。

「ただでさえ仲悪いのに、今は掃討軍のこともあるし、そうとう人間恨んでるだろうね」

瑞紀も冷静に言う。

「袋叩きに遭う可能性も十分にある……」

「……そ、そうだよ？だから、例えば、私だけ行って修呼んでくるとか……」

梓は心配そうに提案する。

「いや、梓にそんなこと頼むわけにはいかないよ」

しかし信治はそれを断る。

「梓はここまで案内してくれたしね。それで十分。……啓太たちもそうだよ」

「え？」

急に話が回ってきて2人は首を捻る。

「この先にまでついてこなくてもいいって言ってる」

信治はそう付け加える。梓を含め3人は、しばらく呆然としていたが、

「……何言ってるんだ」

啓太が呆れたように言った。

「ここまで一緒にやってきたのに、急にこんなところでもういいよ言われても、困るよ」

瑞紀も言う。

「私は『行かない』って言ったつもりはないよ。ちょっと注意しただけ。信治がそれでも行くんなら私も行くよ？」

梓も信治を真っ直ぐに見て言う。

「……分かった。ごめん」

「行こうぜ、信治」

啓太が言う。

「そうだね。行こう」

4人は、山に向かって歩き出した。

深い森を抜けると、広い平地に出た。霧は相変わらず濃いので、はつきりと見ることはできないが、大きな建物が遠くの方に確認できた。

「あれが魔族の『議会』か……」

信治は再び歩き出そうとして、その足を止めた。

その建物の方から、2人の魔族がこちらに向かって歩いてきたか

らである。

「まさか、こんな所まで来るとはな……」

修は半ば呆れた様子で言う。彼の後についてきた由実香は、黙っている。ただ、喜びと悲しみを含んだ複雑な表情を浮かべて、信治たちを見つめている。

「悪いんだけど、俺の中では、話、終わってないからさ」

信治は、自分の言っていることに自分で苦笑しながら言った。

「おとなしく帰れつつても、ダメみたいだな」

修はゆつくりと剣を抜く。

「啓太たちは下がってて」

信治は3人にそう言ってから、自分も刀を抜く。

「由実香、下がってろ」

修も由実香を下がらせる。彼としては、部屋で待っていてほしかったのだが、彼女がそれをどうしても受け入れなかったのだ。

「今度は火傷するくらいじゃ、済まねえぞ」

修は剣を振りかぶる。

「俺だつて中途半端に終わらせるつもりはない」

信治も自分の前に刀を構える。

「そうか……、いい度胸だっ！」

修は剣を大振りする。その剣からは、火の玉が放たれた。
「！」

信治は横にステップしてかわす。地に落ちた火の玉は爆発するように燃え上がった。

「うわっ、あつぶね！」

数メートル離れた所にいた啓太たちにも火の粉が飛んでくる。

「やっぱりレベルが違うよ……」

梓が呟く。

「もう少し下がった方がいいみたいだね」

瑞紀は呆然と立ち尽くしている梓の手を引いて、下がる。

「どうした、攻めてこねえのかっ！」

修は次々と炎を放つ。信治は走ってそれをかわしながら、修の周りを回る。

「時間稼いだって、俺が息切れすることなんてねえぞ！」

修は一際大きな炎を放った。炎は信治を囲むように襲いかかる。

「ッ！」

信治は刀を大きく横に払いながら、炎の中を抜ける。人工魔法の力で炎は碎けるように消えるが、大量の魔法物質に効果が追いつかず、いくらかの炎は信治を直接襲う。

「ぐうッ……！」

それでもなんとか炎の中を抜けた信治は、やはり修に突っ込んでいくことはせずに、再び彼の周りを回る。

「魔法がほぼ無尽蔵だってことくらい……分かってるっての……」

「……いつまで逃げ回ってる気だ!？」

修はイライラし始める。信治は一向に修に向かってくる気配を見せず、彼の放つ炎を避けながら彼の周りを走るばかりである。

「俺を馬鹿にしてんのかっ!？」

修の怒りに反応するように、炎が一層爆発的に燃え上がる。しかしそれでも、信治はそれを刀を払って打ち消し、走り抜け、また彼の周りを走る。

「このッ……!」

修はさらに炎の勢いを強めようとして、異変に気づく。

（魔法が……、ついてきてない……!?!）

辺りは激しい炎に包まれており、外から見ている由実香や啓太たちからは分らないが、修の側……もっと正確に言えば、信治が走って作る円の内側での炎の力は、外側に比べると弱い。すなわち、修の期待に魔法が「ついてこない」のだ。

（『人工魔法の空間』を作ったのか……！）

信治の走る円の半径が徐々に狭まっていく。

「くそッ！」

修がその空間の外に向かって走り出したのと、信治が修に向かって走り出したのは、ほぼ同時であった。

「来たかッ！」

修は、出来うる限りの炎を巻き起こし、信治を迎え撃つ。しかし、彼の魔法は、それまでその空間にあった人工魔法と、今信治が放ったそれとでほとんど打ち消される。

「！」

信治の振り下ろした刀が、修の構えた剣に叩き付けられる。

修も、魔族の中では剣の扱いが上手い方だが、それはあくまでも「魔族の中で」だ。軍人として、ずっと剣だけを扱ってきた上に、修行でさらに実力を上げた信治には、その剣も及ばない。

信治は右に左に刀を舞わせる。修は防戦一方だ。

「くそッ……！」

修は大きく剣を横に払って信治の刀を弾くと、一旦距離をとる。信治は一瞬迷うが、すぐに踏み込む。

（ここは攻め時だよな……！）

「なめんなよッ……！」

修は再び炎を巻き起こしながら、突撃する。その勢いは、人工魔法の影響を受けているのにも関わらず、すさまじかった。

「熱ッ！」

人工魔法が追いつかず、信治は炎を浴びる。しかしその中であつても、彼は冷静だった。力強く刀を振り上げて、修の剣をはね除けると、素速くその空いた空間に向かって、刀を横に振り抜く。

「ぐッ……！」

彼の刀は、修の脇腹の辺りを捉えた。

4 もう一つの戦い

「うわ……、これじゃあ戦況分かんないよお……」

梓が呟く。彼女たちから見えるのは、激しく燃え上がる炎ばかりである。

「どうして来たんです？」

由実香が梓たちに歩み寄る。

「こうなること、分かってただろうに」

「ああ。分かった」

啓太が答える。

「だから信治はこの間まで修行してたんだ」

「そうじゃなくて、」

由実香は首を横に振る。

「分かかって何で来たのかって訊いてるんです」

「それはさっきあいつが自分で言ってたろ？あいつの中ではまだケリがついてなかったんだ」

「『ケリ』って何です？」

「……あのな、」

啓太は溜息をつく。

「今回の件に、お前が求めているような合理性はねえと思うぞ」

「……明確な理由もないのに、来たんですか……」

由実香は俯く。

「だから、そういうんじゃないって……」

「わあ、ホントに喧嘩してる」

突然背後から聞こえてきた声に、啓太たちは驚いて振り返る。

「こんにちはっ」

そこにいたのは、簡素な白いローブを身に纏った少女だった。魔族の印が浮かんでいる目は大きく、無邪気さを感じさせるほどぱっちりとしていて、曇りが無い。一方で口は小さくその容貌は整っていて、美少女といっても過言ではない。

「……誰？」

一瞬見とれて反応の遅れた啓太に代わって、瑞紀が尋ねる。

「啾民城渚って言います」

渚は満面の笑みで答える。

「知ってる？」

瑞紀は困惑した表情を浮かべている由実香と啓太の臍を蹴っている梓に問うが、2人とも首を横に振った。

「みんな知らないと思うなあ。私は上級魔族じゃありませんし、ずっと掃討軍の研究所にいて他の魔族と関わったことほとんどありませんから」

渚は笑顔を崩さずに話す。

「掃討軍の研究所で育った……！？」

「普通じゃねえな」

瑞紀と啓太は警戒を強める。

「まあ、自己紹介はこれくらいにすると……。あなたが千住院由実香さんですね？」

渚は由実香を見つめながら問う。

「そう、だけど……」

由実香は怪訝そうな様子で答える。

「あなたを連れてくるように言われました。来てください」

「えっ……」

由実香は一瞬、ひどく狼狽した様子を見せたが、すぐにそれを取り繕うように

「どうして私を連れていくの？」と問う。

「さあ……？どうしてでしょうね？」

渚は小首を傾げる。

「分からないのによく従うな」

啓太が呆れたように言う。しかし渚はいまいちピンとこないようで
「え？変ですか？」

と、きよとんとして返す。そんな彼女の様子に、啓太は逆に黙り込んでしまった。

「……理由も分かんないのについていけないよ」

由実香は落ち着いたいつもの口調で言う。

「……分かりましたっ」

渚は快活に返事する。

「じゃ、多少乱暴にはなりますけども、引っ張っていきますっ」

この表情と発言との関係が破綻した少女は、そう宣言する。悪寒を覚えた啓太たちは、剣を抜く。

「んっ、邪魔すると殺しちゃいますよ？」

渚は相変わらずの笑顔で言う。

「いいです。これは私の問題なんだから……」

由実香も啓太たちに言う。

「いや……、それじゃあ、信治に顔向けできねえっての」

啓太は剣を軽く振ってから、自分の前に構える。

「そっちにいたって、由実香は私たちの仲間だもん」

梓もそう言って、剣を構える。

「修行の成果を見せる時がきたね」

瑞紀も両手の短剣を構えた。

「みんな……」

由実香はひとつ頷いてから、自分も短剣を抜く。

「……分かりました。一緒に戦いましょう」

「もう、お話は済みましたかー？」

渚は楽しくて仕方がない、というように身体を左右に揺らす。

「それじゃあ、行きますよっ」

渚は鋼の刃を啓太たちに向かって放つ。

「来た！」

啓太は飛んできた刃を、剣を横に振って弾いた。

「！？」

「啓太っ、人工魔法！」

啓太にその声をかけながら、瑞紀は素速く渚の前まで接近する。

「いや……」

啓太は否定する。

「もう使ってるっ！」

瑞紀は、守りに入った渚の鋼の盾に向かって斬り付けるが、盾には傷1つつかなかった。

「ウソっ……！？」

瑞紀は目を瞪る。

「瑞紀っ、離れて！」

梓が叫びながら、渚に向かって炎を放つ。

「溶けるッ！」

しかし渚を囲んでいる鋼のドームはビクともしない。

「……ダメだ」

梓は呟く。

「私の魔法じゃ、パワーが足りない」

「つつーか、何で人工魔法が効かねえんだ！？」

啓太は焦りを隠せない様子で言う。

「今謝っても遅いですよーっ」

渚はにっこりと笑って言う。と同時に啓太たちの頭上に何本ものの刃が現れ、落下してくる。

「！」

4人はそれぞれ、降り注ぐ刃を弾いてかわすが、何本かが頬や腕、脚を掠める。

「いッ……！！」

「まだ終わりませんよー」

渚はさらに刃の雨を降らせる。

「くそッ……！」

「森ッ！」

瑞紀が叫ぶ。4人は深い森へと走り出した。

「え、鬼ごっこですかー？ 私キライだなあ、走るの疲れるし」

渚は言いながら、歩いて彼らを追う。

「おい、どうする……？」

木の陰に隠れて渚の動きを窺いながら、啓太は3人に問う。

「人工魔法が効かないなら……」

瑞紀は考えながら、ゆっくり話す。

「物質としての弱点を突くしかない」

「でも、私の力じゃ……」

梓が言う。

「いや……、あれは多分、鋼だよ」

瑞紀はそう言っ、由実香に視線を向けた。

「……あれ？」

渚は、少し意外そうに小首を傾げる。啓太と瑞紀の2人が森から出てきて、彼女に向かって走ってきたからだ。

「逃げちゃうかと思ったけど」

渚は再び鋼の刃を放つ。

「来る。……頼むぞ、瑞紀」

「うん」

啓太が瑞紀の前に出て、飛んでくる刃を弾く。梓も後ろから火の玉を放って刃の軌道をずらす。

「また突っ込んでくる気ですかあ？」

渚は首を捻る。と、次の瞬間、渚の背後に氷の刃が現れた。

「うわっ」

渚がそれに気づいた時には、氷の刃はもう、彼女に向かって伸びていた。しかし、彼女の反射とは関係なく鋼のドームが形成されて、それを防ぐ。

「ウソっ、死角ないの……!?!」

由実香が呻く。

「これが作戦だったとしたら、残念でしたねー」

氷をあつさりとは砕いて渚が言う。だが、由実香はそれでも彼女の盾を再び攻撃し、凍らせようとする。

「諦め悪いですねえ」

一方、降り注ぐ鋼の刃の中、瑞紀を守りながら進む啓太は、由実香の攻撃によって渚の攻撃が緩んだことに気づく。

「瑞紀、今だっ!」

啓太は剣を大振りして刃を弾き、瑞紀が走り抜けるスペースを作った。

「うんっ」

瑞紀はそのスペースを一気に走り抜けて渚に接近する。

（体の動かし方を意識して……!）

正史の言葉を思い出しながら、瑞紀は速くて重い一撃を叩き込む。彼女のー撃は、由実香によって冷却された渚の盾にひびをいれた。

（いけるッ……!）

瑞紀はさらに高速の斬撃をそのドームに叩き込む。脆くなったそれは鈍い音を響かせていたが、

「わっ」

ついに堪えきれなくなって、穴が空く。

（よしッ!）

瑞紀は最後のー撃を、渚に叩き込む、が。

（……え、）

彼女の手は、途中で勢いをなくした。ドームから直接伸びた刃が、瑞紀の腹部を貫いたのだ。

「惜しかったですねー。あと一歩っ」

ドームに空いた穴から覗く渚は、やはり笑顔である。瑞紀は、自分の身に起きたことが信じられずに立ち尽くす。

「瑞紀イツ！」

森から飛び出してきた梓が、渚に炎を放つ。しかしドームは閉じてしまう。

「てめえッ！」

さらに、追いついてきた啓太がドームに剣を叩き付ける。脆い鋼の盾は、彼の力で再びひび割れる。

「うわ、」

渚は魔法を解いて一旦退く。

「瑞紀さんっ」

由実香も彼女の元へ走り出す。しかし不意に、何者かに後頭部を打たれる。

（しまっ……！）

由実香の意識は、そこで途切れた。

「瑞紀ッ！」

激しく燃えさかる炎の中。そこにぽっかりと空いた円形の空間の中で戦っていた信治と修は、その叫び声に気が付いた。

「なんだ……！？」

修が剣を止める。

「修、一旦休戦だ。魔法解いてくれ」

信治も刀を止めて言う。

「ああ」

炎が幻のように消えて、信治たちの目に飛び込んできたのは、見たことのない魔族の少女と、腹から血を流す瑞紀、そしてそれを支え

ている啓太と梓の姿だった。

「なんだ、どうなってる」

修が怪訝そうな表情を浮かべる。

「瑞紀！」

信治が3人の元に走る。

「あーあ、ばれちゃった」

渚は、さほど残念そうな様子も見せずに言う。と、彼女の側に1人の男が現れる。

「鋼、退け」

「えー？だつてまだ……」

「コウジ様からの命令だ」

「あー……、うん。分かった」

渚は頷くと、森の奥へと走っていく。

「おい、待て！」

修が叫ぶ。

「由実香はどこだッ！」

「さあ？どこでしょう？」

渚は愉快そうに言う。

「待てッ、……ぐッ……！」

修は追いかけようとするが、先ほど信治に受けた傷が痛んで足がふらつく。その間に渚は、霧の向こうに消えていった。

「くそっ……、待ちやがれッ！」

修の叫びと共に、辺りに炎が燃え上がる。彼はふらつきながらも、渚を追って走り出した。

残された4人の周りにはただ、焼け焦げた大地が広がっていた。

5 協調

「ただいま」

「お帰りなさい！」

しばらくぶりに小隊に戻ってきた奏を、美奈をはじめとする隊員たちが迎える。

「ごめんね、迷惑かけちゃって……」

奏は彼女たちに頭を下げる。

「いえっ、そんな……。って、あれ、」

激しく首を横に振っていた美奈は、そこで気づく。

「そういえば、髪切ったんですね！あれっ、小隊長の階級章どうしたんですか！？」

「あー、それは、ね……」

奏は彼女たちと別れてからのことを説明した。

信治たちと再び戦ったが、負けてしまったこと。強くなるために師匠の元で修行したこと。髪を切った理由。階級章を将太に預けたこと。自分が迷っていたこと。自分の選んだ道。

一通りのことを話し終えると、今度は奏が美奈に問う。

「……それで、やっぱりまだ将太からは連絡ない？」

「はい……」

美奈は頷く。

「そっか……。私も何度か電話してるんだけど……、ダメ」

ウェルドでの信治たちとの戦いの後、修行のために正史の元へ向かう奏と別れた将太は、1008小隊の一部の隊員たちと共に信治を追っていった。しかしそれ以降、彼からの連絡は途絶えている。

「その……、1008小隊の誰かとは、連絡取れないんですか？」
「……1008小隊には、ここに帰ってくる途中で寄ってきたんだけど……、その人たちはもう戻ってきてた」

つまり、将太一人が行方をくらましている状況なのである。

「……」

2人は黙り込む。

将太に一体、何があったのか。嫌な予感ばかりが2人の頭をよぎる。

（将太……、無事でいてよ……！）
今、奏ただ、祈るしかない。

「どういうことですかッ！」

議会の席で、修は叫ぶ。

「あんたらは手出ししないって話だったはずだ！」

議長は困惑した様子で、彼を見る。

「……俺は見ましたよ。あれは確かに魔族だった。誰かが動かしたということでしょう!？」

「鎬之宮君、落ち着きなさい」

議長は修をなだめる。

「それだけならまだしも、そいつらは由実香をさらった!どういうつもりだッ!? 由実香はどこだッ！」

「落ち着きなさい」

議長は繰り返し、そして他の魔族たちを見回す。

「確かに、私たちは約束した。それは、議会の決定という意味だったはずだ。それなのに、このような……、議員の足並みが揃わないのでは、困る。違反したのは誰だ? 名乗り出なさい」
議会がざわめく。

「私です」

意外にも、犯人はすぐに名乗り出た。

「……お前は、わたみしろあきのり啾民城明憲だな？」

「はい」

中年くらいの男……明憲は、余裕のある様子で答える。

「どうして由実香をさらった！？あいつは今どこに……」

「仕方がなかったのだ」

修の声を遮って、明憲は言った。

「仕方なかった？」

「私は、皆さんに提案したいことがございます！」

彼は急に大きな声で議員たちに向かって言う。

「おい！俺の質問にはまだ答えてねえぞッ！」

「……君の質問の答えにもなる」

明憲は冷ややかな視線を修に送ってから、議員たちの方に向き直る。

「……話を聞こう」

議長が言う。

「はい。……実は、私はこれまで、人間……、魔族掃討軍と交渉を
してきました」

「な……！？」

修は言葉を失う。

周りの魔族たちも動揺しているようで、落ち着きなく側にいる議員たちと囁き合っている。明憲が人間側のスパイとして動いていたとすれば、議会の位置やその役割といった情報はもちろん、議員1人1人の情報も漏れた可能性がある。彼らは何よりも、自分の身に危険が起ころうことを恐れているのだ。

「静かに」

ざわめく議員たちを諫めてから、議長は明憲に問う。

「何故、そのようなことをした？」

「もちろん、私もこの議会を守りたいと思っております。ですから、議会の情報をいくらで売るとか、そういう交渉をしていたわけではありません。そうではなく、議会と掃討軍との協調の道を探っていたのです」

「協調……？」

議長は目を細める。

「そんなこと、できるわけねえ」

修ははっきりと断言する。

「奴らの目的は魔族の殲滅……」

「私が、この場で失敗談をするとも思うのか？」

明憲は不敵な笑みを浮かべる。

「と、いうことは、上手くいったと言うのか……？」

議長が問う。

「ベストではないかもしれませんが……、我々の安全、プラス、彼らの技術は手に入られます」

「まさか！」

議会が再びざわめく。

「本当です」

明憲はにこやかに言う。

「……だが、タダでつてわけじゃねえだろ？」

修がじれったそうに言う。彼としては、それよりも早く由実香の居場所を聞きたい。

「……ええ、まあ」

明憲の答えに、議会は静まり返る。誰もが、彼の話す「条件」を聞き漏らすまいとしているのだ。

「条件は、2つ。原則彼らへの攻撃をしないことと、魔法に関する研究に協力することです」

「ふうむ……」

議員たちは、それぞれに思案を巡らす。

「しかしその……、『協力』とは……？」

議長が問う。

「ああ、それはですね……」

明憲はそこで、しばし間をおいた。どう話したのか、思索しているようであった。

やがて、彼は口を開く。

「簡単です。ただ向こうの要請に応じて、魔族を派遣すればいいのです」

「なるほど……。しかし、さすがにそんな話に下の魔族たちが従うとは思えない……」

「それどころか、反乱を起こすかもしれないぞ……」

議会からは否定的な意見があがる。

「いえ、その点は問題ありません」

明憲は断言する。

「上級魔族の恐ろしさはよく分かっているはずですし……、たとえば反乱が起こるようなことがあっても、掃討軍から軍人を受け入れることになっていますから、議会は安全です」

修はここで、議会に不穏な空気が流れ始めたことに気づく。

「ふうむ……。掃討軍の軍人をここの守りにつかせれば、議会の安全は保障される、か……」

議長が唸る。

「この話に乗れば、魔族の滅亡という最悪の事態は回避できます」

「まてッ！」

修が叫ぶ。

「それじゃあ、下の魔族たちはどうなるッ!？」

「だから、仕方がないことだ」

明憲は無表情で答える。

「なッ……!!」

修は哑然とする。と、同時に、彼が先ほども同じ言い方をしたことを思い出す。

「仕方がないって……、まさか、由実香も人間に売り渡したってのか!？」

「『売り渡した』とは言い方が悪いな。彼女には、向こうで少し研究に協力してもらっただけだよ。……彼女はちよつとイレギュラーだしね」

「てめえッ……!」

修は、余裕の笑みを浮かべながら話す明憲を睨み付ける。

「まあ、落ち着きなさい」

議長がそんな修を諫める。

「あくまで『研究への協力』だ。殺されることはないだろう」

「そんな、『だろっ』って……!」

修は議会が傾いてきていることに寒気を覚える。

「皆はどう思う?」

議長は周りを見回す。自分からそれを口に出すのは憚られるのだろう。

議会はざわめく。しかしそのざわめきの中に修が聞き取ったのは、「魔族が生き残る唯一の手段」だの「人間との協調は将来的に大きな意味を持つ」だのと、もっともらしい言い訳だけだった。修の中でそれらの言葉の持つ意味は1つ。「自分たちだけは助かりたい」だ。

「……よし。議会では、啍民城明憲の案を採用することとする」議長がそう告げるのを聞いて、修は席を立つ。

「どこへ行く?」

不敵な笑みを浮かべて、明憲が問う。

「……ここじゃなけりゃ、どこでもいい」

修は吐き捨てるようにそう言って、議会を出た。

6 第3の道

「隊長つ、隊長!」

奏が0309小隊に復帰してから1週間ほど経ったある日の朝、奏の部屋に飛び込んだのは美奈だった。

「どうしたの?」

奏は、彼女を落ち着かせながら問う。

「副隊長が!」

「えっ、将太!? 将太と連絡ついたの!?!」

「はいっ、今日の夕方頃には戻るそうです!」

「無事なの……?」

「はい、怪我はないようです」

「そっか、よかった……」

奏はほっとした様子で、椅子に深く腰掛ける。

この数日間、将太との連絡は全くつかず、彼女は眠れない毎日を送っていたのである。

「帰ってきたら何か奢らせてやる」

奏はそんなことを言って、美奈と2人で笑い合った。久しぶりに気持ちのよい朝だった。

そして、その夜。美奈の報告通り、将太は小隊に戻ってきた。

「お帰りなさい!」

明るく彼を迎えた美奈たちにああ、と素っ気ない返事をした将太は、すぐに奏の部屋へ向かった。

隊長室の扉を叩くとうーん、と曖昧な返答が聞こえる。

「……入るぞ」

声をかけてから扉を開けると、机に突っ伏して眠っている奏の姿が目に入った。

「あは、眠っちゃってる。隊長、副隊長のこと心配でよく眠れなかったみたいですよ？」

彼の後について部屋に入ってきた美奈がそう言って奏を起こす。

「隊長、副隊長帰ってきましたよ」

「うっん……、え！？あつ、あつ、お帰りっ！」

奏は慌てて立ち上がる。そうとう焦ったのか、立ち上がった拍子に机に膝をぶつけて小さく悲鳴を上げた。美奈は苦笑しながら将太を見る。

ところが、将太の表情は硬い。美奈はそれを怪訝に思う。

彼はもともと、表情の豊かな人間ではなく、先ほどの素っ気ない返事も平生とは変わらないものだが、それでも、今のような光景にこりともせずにいるほどクールな男でもない。

「……将太？」

奏も将太の様子がおかしいことに気づいたようで、怪訝そうな顔をする。

「……奏。上から、軍の新しい方針が伝えられた」

将太は無表情で言う。

「新しい、方針？」

奏は小首を傾げる。

「ああ。とりあえず俺は、それをお前に伝えなきゃならない」

「え？でも何で将太経由？」

「俺はお前よりも早く、アクネに1度戻ってきてたんだ。ここに帰るつもりだった。だけど、その途中でここに向かつてる軍人に会った。けっこうたくさん部隊に通達にまわんなきゃいけないらしくてさ、隊長が今いないって分かったら、お前から伝えてくれって」

将太はそう説明した。

「あー、そういうこと……。でも、だったらなんですぐに連絡くれなかったの？」

「……」

将太は少し考えるような様子を見せたが、すぐに口を開く。

「上からの提案に乗っかろうと思ったから」

「？」

奏と美奈は顔を見合わせる。彼の言っていることの意味が理解できなかったのだ。

「軍は今、議会を守る兵を募ってるんだ」

「『議会』？」

奏は首を捻る。どこのことを指しているのか分からない。

「衛兵になれば、今よりも金が入るし、地位も上がる。この話に乗らない手はねえよ」

「いや、ちよつと待って！何、何ということ！？」

奏は先走る将太を止める。

「『議会』ってどこのこと！？……いや、それよりもまず、軍の新しい方針についてののを教えてよ！」

将太は先走っていた自分に気が付いたようで、一呼吸おいてから再び話し始める。

「軍の新しい方針ってのは、魔族との協調だよ」

「協調！？」

奏と美奈が同時に声をあげる。

「ああ。……もちろん、人間側にも利はある。魔法に関する研究への協力が得られるし、軍の資金も潤沢になる」

「魔族側が和解しようって言うてきたんだね」

奏は肩をすくめる。

「人間の研究には協力する。金も出す。だから命は助けてくれってことでしょ？……今まで人間を支配してきたくせに……！」

「……」

将太は憤る奏を、なぜか冷めた様子で見る。そんな彼に美奈は違和感を覚えたが口には出さない。

「あれ？でも、さっきの将太の話とは繋がらないような……」
奏は再び首を捻る。

「繋がるよ。『議会』っていうのは、魔族の中のリーダーたちが集まっている所のこと。俺らでその安全を確保するんだ」

「え、でも……、何から？人間以外に誰が魔族を攻撃するっていうの？」

「魔族だ」

将太は短く答える。

「えっ？」

奏は怪訝な顔をする。

「意味が分からないんだけど……」

「下の魔族から、そのリーダーたちを守るんだ。今回の話に、下の魔族はおそらく反発する。なんせ、安全なのは上の魔族だけで、下の魔族は実験材料にされるかもしれないんだから。だけど上の魔族は、それを力で押さえようって考えてんだよ」

「何それ」

奏は呆れた様子で言う。

「さすがに下の魔族に同情するね。そいつら、自分たちさえよければ、それ以外はどうでもいいんだ。最っ低……！」

「いや、そういうもんだろ」

「え」

将太の言葉に、奏はぎょつとして彼を見る。

「この世をうまく渡っていくのに必要なのは『いかに他を欺いて己を満たすか』だと俺は思うね」

「な……に言ってるの……！？」

奏は背筋に寒気を感じて、将太から1歩退く。と同時に、奏は自分の失敗に気づいた。

将太^{あいつ}は時々、ひどく不安定になる時があるから……

正史の言葉が頭の中に響く。その意味を、奏はよく分かっていたはずだったのだ。

多くの人間は、心の中に不変な「柱」を持っている。「意地」や「信念」といったものだ。例えば奏にとってのそれは人間の世界を守りたいという想いだし、信治の場合は、2つの種族が噛み合うこの世界を変えたいという想いだろう。

しかし、将太は違う。彼に「不変」は存在しない。熱しやすく、冷めやすい……。だから、周りの影響を受けて良い方向にも悪い方向にも傾く。それを正史は「不安定」と表現したのだ。

（私は分かったはずなのに……！）

それなのに、彼を1人で行かせてしまった。その結果、彼は第3の道に出会い、大きく傾いだ。

「……将太、その話……、掃討軍にとっての本当のメリットって何？」

奏は、自分でも驚くほど冷静に訊いた。その答えが、自分と彼とを引き離すものであることは、よく分かっているはずなのに。

7 将太 対 美奈

「本当の？それは、どういう意味だ？」

将太は問い返してくるが、奏から見ればそれは下手な演技だった。

「軍の資金が潤沢になる。……その資金はどこから？」

奏は問いつめる。そうしなければ、自分に嘘をつくことになる。彼女にとって、それは出来ないことだった。

「賠償金だよ」

将太は真剣な表情でそう言う。

「違う。もっと、永続的な資金調達の手段があるんでしょ？」

動かぬ証拠があるわけではない。だが、彼女は彼の「幼なじみ」だ。「親友」だ。だからこそ、分かっている。

例えば、将太は真っ直ぐな男だ。だから嘘をつく時もそのことだけに意識を集中してしまい、普段よりも熱がこもった話し方をする。嘘をつくの的一生懸命になってしまいがために、彼の嘘はすぐにはれてしまうのだ。そのことを、奏はよく知っていた。

「……そのことに関しては、他言無用ってことになってんだけどな」

将太は、誤魔化すことを諦めたようだった。

「……掃討軍の軍備に関する税だよ。それを上げる」

「でも、増税なんかしたら、みんな黙ってないんじゃない……」

美奈が指摘する。

「魔族を、使うんだね？」

しかし奏には、既にその計画の大枠が見えていた。

「増税に反対する人たちには、その必要性を分からせればいい……ってことでしょ？そうすれば、増税だけじゃない、掃討軍に関するあらゆる制度を自由に作ることができる」

「えっ、え、それって……！」

美奈もその方法に当たりが付いたのだろう。青ざめた様子で呟く。
「その『作業』をするのは議会の衛兵になった人間の中から選ばれるんだ」

将太は開き直ったようで、薄く笑みを浮かべて言う。

「わざと魔族を町で暴れさせ、選ばれた軍人たちが偽りの正義をかざしてこれを撃破。……素敵なお芝居だね」

もちろん、奏に笑顔はない。

「……奏は、そうだろうと思った」

将太は笑みを消して奏を睨む。

「だけど、この流れに逆らって……、それでどうなる？ 全てを失うだけだ。それよりも流れに乗って今以上の生活を手に入れた方がいいに決まってるだろ」

「何が『決まってる』って言うの！？」

奏も将太を睨み返す。

「仲間を騙して、民を騙して……、その結果お金や地位が手に入って……、その何が嬉しいの！？」

「さつきも言っただろう？ この世の中、自分が生きるためには他人を踏み越えていかなきゃどうにもなんねえんだ」

「違うよ！ 違う……！ それは逃げてるだけ。他人を助ける余裕はないって、早くに自己完結させちゃってるんだよ！」

奏は将太に訴えかける。

「奏の考えてることは幻想だ。現実のものじゃない」

将太の言葉に、奏ははっとする。そのフレーズに、聞き覚えがあったからだ。

幻想にすぎないよ、それは

幻想なもんか……

（ああ、私が求めているものも、将太^{かれ}にとっては『幻想』なんだ

……)

奏は心の中で苦笑する。

(だとしたら、私が『幻想』だって言った^{あのひと}信治の考えも、見方によつては現実のものなのかも)

「……ここまでだな」

将太は溜息をついて、剣を抜いた。

「何してるんですかっ！」

美奈が声をあげる。

「さつきも言っただけど、魔族を使つた『作業』のことは秘密なんだ。そういうやつは消せって言われてんだ」

「そんなの……させません！」

美奈も剣を抜く。

「美奈、いい。私がやる」

奏は、自分を庇うようにして将太と対峙している美奈に言う。

「嫌です！2人が戦うのは見たくない……！」

しかし彼女はこうとしない。

「別にどっちでもいいよ。最終的には2人とも斬るんだから」

将太はそう言うと、美奈に向かって突進する。

「！」

将太の放った斬撃を美奈は横に逸らす。

「やむを得ないのなら……、私があなたを斬ります！」

美奈は彼が再び振り降ろした剣を受け止め、弾くと、今度は自分から攻める。

「！？」

美奈の剣に将太は翻弄される。

臨時の隊長を任されるだけあって、美奈の剣の扱いは隊でナンバー3と言えるほどのものだ。それどころか、経験を抜いて純粋な剣術で比べたならば、将太と肩を並べられるだろう。それほどの才能

が、彼女にはあった。

加えて、将太には「油断」があった。「自分よりは劣っているだろう」という慢心が。だから予想以上に速い美奈の攻撃に対応が遅れ、彼女の剣に翻弄されてしまったのだ。

剣を大きく逸らされ、彼の胸が空きになってしまったのも、彼の「油断」が生んだものだった。

（入る……！）

美奈はその隙を見逃すような剣士ではなかった。……しかし。

（えッ……！？）

彼女の剣は、入らなかった。

将太が、彼女の剣を受け止めたのである。まるで、美奈が振る剣の軌道を始めから知っていたかのように、なんの躊躇いもなく彼はその軌道上に剣を動かした。

その動きは無機的で、機械的で、予想外に攻撃を防がれたことも相まって美奈をひどく動揺させた。

「美奈ッ！」

奏の声で彼女が我に返った時には既に、将太の剣が彼女に向かって突き出されようとしていた。

「……ッ！」

持ち前の運動神経のよさでとっさにしゃがむが、将太の剣は彼女の左肩に入った。

「ぐッ……！」

素速く彼の剣を弾いて距離を取るが、肩の傷は浅くない。鮮血が溢れる左肩を押さえながら、美奈は片膝をつく。

「……残念だったな」

将太が再び剣を構え、彼女にとどめの一撃を振り下ろした。

8 喪失

将太の剣は弾かれた。奏が2人の間に割って入ったのだ。

奏はさらに、高速の斬撃を将太に浴びせる。しかし将太は、またも無駄のない機械的な動きでそれをことごとく受け流した。

「……確かに将太の動き、変だね。美奈が動揺したのも分かる」

奏は剣を軽く振ってから、将太に向ける。

「何をしたの？」

「奏が師の所で強くなったように、俺も力を手に入れたんだ」

将太は薄く笑みを浮かべた。

「『手に入れた』……？」

奏は彼の表現が気になった。

「『自動反応システム』とでも言えばいいかな……」

「『自動』って……。将太、自分の身体に何を……」

「頭にな、小さな機械を埋めるだけで、あらゆる方向からの攻撃に対して自動的に身体が動くんだ。すごいと思わないか？」

将太は後頭部を指で軽く叩きながら言う。

「……」

奏は啞然とした様子で、彼を見る。

「ラッキーだったんだ。俺は衛兵にかなり早い段階で志願したからさ、こういう『力』までもらえた。この機械はまだ、大量生産できるまでには至ってないから、今は手に入らないんだぜ？」

将太は得意げに話す。

「そんなの……、上にとって都合のいい実験体になったってだけじゃないですか……！」

美奈が痛みに耐えながら叫ぶ。

「それでもいい」

「はっ？」

将太は美奈を睨んだ。

「上の実験に利用されたって『力』が手に入るなら構わねえ。『天才』には分からねえだろうけどな！」

「そんな……、私はッ……！」

「美奈、もういい」

なおも将太に訴えかけようとする美奈を、奏は止めた。

奏の心は冷え切っていた。将太の話を聞くほどに冷えていくその心には、今、怒りの感情がない。それどころか、悲しみ、哀れみすらもない。「感情」と呼ばれるものが、全て凍り付いてしまったかのようにだった。

「……将太、」

言葉にも、感情がこもらない。しかし奏は、その方がいいと思った。今はその方がいい。そうでなければ、今のこの状況に彼女の精神は崩壊してしまうように思われた。

「それが、将太の選んだ『道』なんでしょう？」

「……ああ」

将太が答える。

「それなら、もうそのことに関して、私は何も言わないよ」

「たっ……、隊長!？」

美奈が声を上げる。

「だって副隊長は……!」

「ただし!」

奏は叫ぶ。

「ただし……、私は絶対にその道を認めることはないよ。だから……、ここで私が斬る」

奏は抜刀の構えをとった。

「俺もそのつもりだ。お前を斬って、それで俺は軍の本部に行く」
将太も剣を構える。と、同時に奏が素速く将太に向かって斬りつける。

「無駄だ。当たらねえ」

将太はその剣を受け止める。

「……将太は、間違っちゃったね」
奏は呟く。

「言つてろ」

彼女の剣を将太は弾いた。しかし奏はすぐに体勢を立て直すと、再び将太に素速い斬撃を浴びせる。

奏の剣は、例えるなら台風のように暴れた。風のように速い斬撃が、四方八方から将太に叩き込まれる。それくらいの勢いがあつた。そこに迷いは感じられない。そんなものは信治と「喧嘩」した時にもう捨てた。

「！」

あらゆる方向から叩き付けられる刃は、将太の認識の限界を超えていた。彼を動かしているのは頭の中に埋め込まれた小さな機械のみである。

（だけど、この力さえあれば）

と次の瞬間、一撃が将太の頬を掠めた。

（え……！）

彼の中で「最強」であつたはずのものが、あっさりと破られる。彼が驚いている間に、さらにもう一撃。

（機械の処理が追いつかない……！？）

将太の中に恐怖が生まれる。

感情とは恐ろしいものだ。恐怖心は精神^{うち}だけでなく肉体^{そく}にも影響を与えるのである。強張った体は機械による動きをますます悪くした。

「あアッ……！」

将太と奏が戦い始めてからたったの2分。将太の剣をはね除けた奏の剣は、彼の機械的な反射速度を超えてその左腕を捉えた。

「……………」

美奈は目の前の光景に、言葉を失う。目を背けたくても、身体が動かない。…………いや、それ以前に背けたいなど考えることすらできなかった。

目の前には、信治の剣を振り抜いた奏。そして、左腕を失った将太。辺りは鮮血で彩られていく。

「そんな玩具で、私に勝てるわけないでしょ？」

奏は冷たい視線を将太に向ける。

「このッ……………」

将太は部屋の窓を剣で叩き割ると、外に飛び出した。

「っ！副隊ちょ……………」

我に返った美奈が後を追おうとするが、奏がそれを止める。

「いい」

「でもっ」

「それよりも自分の怪我のことを気にして…………それから、それ」
奏が視線で示したのは、将太の左腕である。汗が浮かんでいる辺り、生々しさが感じられる。

「軍の医療機関で保存してもらって」

「え、隊長…………？」

「早く」

「あ…………、はい」

美奈はすぐに行動を起こした。

彼女が部屋を出ていった後、奏は隊長の椅子に腰をおろす。

部屋は酷い有様だった。窓は叩き割られておりガラス片が床に散っているし、壁には早くも黒みを帯び始めた血の染みが広がっている。その臭いもかなりきつい。

奏は疲れ果てた様子で、何も考えずにただ座っていた。視線をあちこち泳がせていると、机の上の写真立てに目が止まった。

その写真は、軍に入る前に撮ったものである。前屈みになって笑う奏の後ろには、肩を組んだ信治と将太がいる。

「あー、疲れたー……」

重い空気が嫌になって出した声は、震える。……と同時に涙がこぼれた。

「ああ、もう……」

自分でも無理をしているのは分かっているが、他に誰もいない部屋で奏は気丈に振る舞おうとする。……誰に見栄を張っているのかも分からずに。

奏はそうして、ただ溢れる涙を拭っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1244w/>

悪魔 - デモンズ -

2011年11月22日17時29分発行